



八冊口傳書上

73

3645

428





(428)

門 73
號 3645
卷 428

一 進納禮
 二 艤技要集
 三 配膳門
 四 配酌門
 五 古實
 六 昏禮
 七 書札
 八 積方
 九 進納禮百ヶ条
 十 同附録



進納禮目録口傳

一 貴人への禮申上候之事

是ハ當儀にハ獨禮も生礼も也四月又ハ
初而御目見時ハ御前出次之間より階梯
両手と袴のとみ正袴と指を押し括りつりと
ひらげん摺足に御禮申上候に居候膝を
下に居た膝斗突たきと垂て突右きと右
膝と後へ引たきと右きのはらひ掛り射を
膝と押(空親居の時ハ御次行儀洞とえと
我右と呼時お頭と改申にハけあきの上ハ
額とまゝに御禮申上候苗字と唯ハ後と
ハけりしハ調子早速思し右と呼候る時
額と両手の上へしるものハ礼終り御儀ハ改と
先(仰りまゝは凡言也惣膝に記后の方ハ
階に立先たきとた膝の上へた眼と先は
九眼とた眼の右ハ引合言と右有膝と三膝

いとも振らざるを勝のとりとる也此の音ハ
歸り付き若手と右膝のとりとる也とし
尤眼し引合たりと膝入る九一廻り三より
此獨れのふととりとる百々条のふ個わたりと人
坐礼二年とちり正八也事也銅管枕を
何ととりとるは膝の三指舞と入りとる
西次の目色のいあるとは山田と呼わたり人
お同きいさしを中とりとる人の方とちり
振る振りとの年額お高句はと人とお礼と
獨れとちり三四人連ちり此れは二列の此れ
しつね

一三四人二列にお礼の事

是はを留向にくも外候はこしつ夜に連れま
お礼禮り時を先にお人静にお礼り哲人の
是早に折換おき人の音一向一固お左膝と
高と右膝と退左膝と引合運速おく

一固りは禮りよるは退時きり度のものより
もろくととるもの也

一貴人御手懸申地拜領の事

是ハ下座にくと此礼と付貴人懸申あま下
仰り時此後には礼り右三よりなり九の音ハ
なり下座のおまらるへ后向貴人の方より此
座を腰と付此手にて服差と振るも後御前
高とちり人より三足申此言ハ長り両手空覆座
多時懸申とちり内摺お若手の腕りたは座
比しと右手ハ遠く九と空右膝より取入退
長懸申あま下座にくと後し若ちらハ二
折若手と仰り此と下座此氣之様には中
してお座の場りも人の方此膝より畏こも
より手と空服差と手お折次お退也又の
お次お吸物とほお座をとり置り下座
ありて服差と振るも人にお向あも空折つし

是ハ他のある主人の儀禮の時も信軍の礼
太刀と槍を中へ太刀目録と両手物お尻膝
交右膝と交右膝にお目録の中にて廻り
下丹を扱ふはこれの人の名を呼ぶ礼なり
是れと名の扱ふはこれの儀禮の人の入り時
扱ふ太刀目録と一度お持をこきと名の納
つて来るは儀

一鳥目三身中禮之事

西内ある主人入部み始て君臣交結の時自分
に鳥目持お尻膝よりこき目の中程と右
手と仰けお尻とこき目の前此方より身を
持お尻膝と下お尻膝とつて右膝と
つて膝に鳥目と此方より退る礼なり
並扱ふは儀

一同鳥目引換之事

此礼の人の扱ふに入らば時お鳥目と引かき
尺間と並扱ふ扱ふ右手にて鳥目と此方と
つて

一信軍他人持茶目扱ふ事

再次の人若手に鳥目の中へ持たしは此方
左膝と交右膝と交結に鳥目と扱ふ並
扱ふはこれ何某自の儀禮と申すは此礼の
扱ふは入時扱ふ鳥目とつて

一扇子箱三身中禮之事

自身持お尻膝にも他人に持たしは此方と
扱ふ中にて箱より扇を張れば是は此方と
扱ふとして持お鳥目とつて退り礼なり
他人扇を手にしは扱ふは此方とつて

一太刀目録情取扱ふ事

是は扱ふ若しして使者太刀目録と右手物
太刀にて槍を押し先扱ふは此方とつて
左膝と交右膝と交結と扱ふは太刀目録と

右之方に意三箇子扱き以上より後花車に
目録右手に寄ると海若し折紙に担申にて後
すし信元人左手に折紙右手に寄ると後九
外込石巻とつら折紙を扱き且し本分に
将届便書の信名同申申中つ礼を折紙
とたより無様し之等のより便書は尚書
折紙の字法と扱き扱き不備申すやと云し
元次、信元扱き申し扱き之時主人の傍せ
り扱き字法と持たはるる寄の上折紙
と扱き河津信之寄のりには折紙と扱きは尚書
の信名也と信

一 同扱き納扱き事

貴人より一五目二五め或三五目と扱き勝と
実と折紙と扱きの上は金次に寄ると折紙の上は
扱きと申し扱きに並治と扱きと申し扱き
折紙と扱きと扱き折紙と扱きと扱きと扱き

右手に上太刀と取石貫とたす折紙と扱きと
先扱き人扱き主人の寄ると太刀目録とをくま
扱きと申し扱きと扱きより扱きと扱きと扱き
引とけと申し扱きと申し主人より上軍の寄り
来りき太刀目録と扱き扱き右の寄りに並治と実
使者の寄りと同申く同扱き以下右の巨くと但信名
信申より馬代西也と済きまゆり高と同寄
り下寄り目録と右の寄りと申し扱きと
扱きと申し扱きと申し扱き

一 両貴人出度しの扱き事

是ハ父子の寄りより貴人より扱き扱き寄り
他所より使者に寄り寄り寄りと主人扱き扱き持出
る我右の寄りに子母より扱き寄りと他寄りと寄り
何れ時自他太刀に切先むくめ扱き折紙の
上に太刀と扱き寄り切先不向折紙扱き扱き
と扱き扱き寄りに寄り寄り扱き寄りのり扱きとめ

下より左手と伸げ物右の身と柄の上より
持折紙の上より折る日傳

一 風吹太刀拒否之事

是ハ度袖向はるり的場にてり各目錄拒否後
中時俄に風吹来折成と下に重なり折紙
と下に重なり折紙を押し居る右に身を
太刀と折紙の上に重なり元母風吹た方より
右目ハ膝曲の途中にて後両指とくも余
座敷向にけり的場より風吹中時
折紙を押し居る風吹の拒否後事

一 太刀目錄書状係之事

是は封状入り状書持物は各目錄
状の係り状を懐中して各目錄を右に
上るもの各首のく各目錄を右の首に
柄子と後扱物と懐中し出したるは
左手と口よりその状を左手に扱し

右手と口よりその状を右手に扱し
柄子とくし扱事あるに之状を各状の
裏とくし懐中す使太刀折紙と後事と
後左右の状とついでて各各各目錄と
持お下に重なり退る状と懐中し扱
と右目にてけりその後状と主人に扱し
各各目錄と引く状を右より上の口は

一 書状申渡之事

状と懐中し右手に持とり各各各
にて状を左手に持移し右に柄と扱状と柄
の上に重なり各各各口より状を左手
持移し右手に持移し向き候に
かり向下方にけり状を左手に扱し
は上より扱し状と後事と扱し
先様の内右と上にて柄の上にて各各各
使者の口より其向と扱事するにけり扱し

右手に後免状と左手に持福し右に手裏
使者の名と申すは種々様々御用掛有る
九手と厚持おちり度にと右手を交はと
し手扱上り右手中に取替し九手と右腕原
九時と実状と申すは口傳

一 太刀袖黄を馬代階扱之事

中袖はとく上り口扱か二三折りて九の時
右の方向に積る積も片袖の折し後細
の袖を袖を上にさし置く但儀礼の上は
時を袖と申すはあまの包耐事と上り置く
黄をも式法に紙に白也當時世間向御事
にくゆる居るくはま扱おるもしを御用
扱名扱上り黄とく扱に黄をを使ふ九
手に持上りし右手中に中袖をを手に
黄を馬代之時馬代に取替し置く
右目録と使者階扱とあり世間向御事

左に太刀目録と右に持上り添へおちり
ヶ扱の事 時宜おちりし

一 同扱後之事

太刀目録と持上り添へし小袖代黄を右代と
持出まじ上り置るは小袖を代と先に
出し初より右方扱を後申すは他儀は御用掛
持多の時の小袖馬代は先小袖馬代と主人は
目録に勝るは太刀目録と持上り人の御手
上り置るは御用掛に取替し又銀子を扱後
等は言代の黄散に不及び二枚三枚を扱後
の時、馬代小袖念入申す上り時主人
の右腕原申す御用掛はあまに目録を御用
折紙と申すは目録に付太刀の間に置退居る
御用掛をゆつた太刀目録と納るもの銀表を
御用掛の中し式法は黄をも不扱御用と
し一と申すは世間向御事代入は言ねるな(おちり)

便者ハ父の目録と上の子の目録を下に
太刀と父の左方を上より目録二ツを右に
に持よりぬわぬ目録と先の方上の目録とを
前の方へなりへを上の左方に柄ふたを
右に左方に目録の上より先父の口とより
子の口とよりしるすを折紙をえたとハ
是ハ大如書ありを後より後次ハ先の方に
重なる方目録をえしと重なるより後々
いれしりしり取次ハ父の本目録とつけん
書(折紙)折紙を右目録と母あれ方に重なる
一紙して重なる方先に重なる太刀を
右の方に向の左方より折紙の右の方へ
左方とつる方より目録を向に目録は
上より左方より折紙の指す方なり

一曰 扱書後之事

先次の中より母子の二方より物出

下の目録を先の方より目録を右の方へ
上の左方に柄ふたを右の方に向に
折紙の上より上の左方を右の折紙の上へ
重なる方より折紙の右の方を先の方
れ上より右の方へ折紙を向の折紙の
上より物出より自分の主人より他より
時に親父のあつて腰子身の前へ別に扱書
中より右の方へ右の方三腰子目録三腰
すは先親父の左目録を持より折紙を
右の方二腰を折紙の上へ折紙の事法外より
すも書世より重なる方と記すしもの

一 扱目録渡極之事

是ハ中より右の方より目録を親父の
式書へ重なる目録を右の方を向より
便者右の方より右の方より折紙の口とより
折紙目録を折紙の口とより折紙の口とより

と我言つては後日し再次に後日と右の言へ
おろし扱見しつてまじはる目録の面楷者
とまじらば使者傳すの事な扱見後すれ
楷代りしふ止おる迄百止と張切使者目録を
扱見しし傳す事いを入る迄に再次に何事
にて目録を伝ふお扱見らるし口傳

一 同扱務之事

目録をあるお物事家の言ふ事ありて
持出御前へ目録を呈する迄の上におろし
目録ありて是にともおある事にて書物言ひ
る人お書物の言ふ事あり目録おある事
物におも出御ありて目録を扱見
しつての口傳

一 目録傳授之事

ある一色のを物にては皆目録ありて
りて伝ふお物事あるは後日と右の言へ

我言つては持上り目録を御前へ扱見し
者にて目録を伝ふ事にて是より傳し
と伝ふ事にて後日と先様下軍の言ふ事
目録を伝ふ事にて是より傳し
中にては後日とある事にて後日と
目録を伝ふ事にては使者の言ふ事にて
伝ふ事にては後日とある事にて後日と
あり口傳

一 同扱務之事

右手に持たしと伝授むる事にては
後日録を伝ふ事にては後日とある事
口傳ありては後日とある事にて後日と
目録を伝ふ事にては後日とある事
より目録を伝ふ事にては後日とある事
持出御前へ目録を呈する事にては
しつて物事ありて人お物事お目録を再次に

出るもの口傳

一 庭三抄尾太刀主人と極事

是と白洲抄尾も庭抄尾より將軍の
親王宮方御園山門路等へ持参の太刀と
言聞前より主人と稱し事く若の事より
上るに太刀の書引を我れと抄尾太刀の下り
折盛の家院の方と居麻りゆり上るたの方
より上るに太刀と振出しせり主人の若くは
下りにて折盛の家院ととりとて記す
此時斗に限り折盛と我讀極に持て主人、
極せ中ふ口傳ありしを代り右以上の
太右の事院の御言動上のは太刀ありとの
留言お抄参りてお方の書言と預隔しと
伊豆園書はて主人の御言よりゆり上る
以下三子右以上の書くは太刀目録と主人の
ゆり上る

一 太刀目録と目馬代

是は他の主人の目見中目録に言目馬代
馬代にて持参り時太刀目録と若に御言目
と九年に持より先た小言目を前より後の方へ
望し重若小太刀目録と書言極と極次一極と
扱たりと致ひ隔したの言目とたゆわ御言と
居隔すと極次は方折盛と若小言たよと言
目より若と極極た手にてたの方へある
扱太刀目録と若小御言目とたゆわ極と極
と時の言目と極ゆふ御言目録持せ
兼の極極にてゆわし御言目へ使者太刀
之時き極と言目と持とゆわし御言目にて下番
かた極と極とゆわしは極極御言目
ある主人の御言太刀目録にて自身の御言目
御言より御言の馬代御言目録の時使者と御言
代りて下り不方の時を極志の言代御言目

馬代何る事

一 多目後居之事

是に右手に多目の中を封部を先へて握り
右の方に壁に身を仰て坐す座を膝の上取れり
右手にて兩身通にくと左手を床にすし後兩膝
右手にて上と左手を床にすし後
に抱たきと交つ礼して互抱たきと多目床
まに控後へ付きた膝とほら右膝とつら後
多目を横にきみし押出しにす押上り
右手にて取たきと床持て今へ多目へ又
く控後居より取れり

一 香奠多目之事

むかし死人の初に多目をきめ一徳を後控後
と仰り香奠付多くし事方へ多目香こえし
何のい目録も徳入りを銀と申しぬ多目
高へは一香奠にても又香こえし付合

方を手前にて持より右の方に前より後へ
手ごころむ多目は上へ右手にて上より左
手を床にすし後居より右手にて上より後
方を右手にて上より左手を床にすし後
は傳控後いたきと互につら右手にて我右
より左のうへへ控後居より手ごころむ多目
上座くあらに中座へあ言し祝部多目を封部
に取れりしも仰向し山禮の多目を封部とす
て成まごころむとんはつし又常の如く封を
上座つして持出を控後右手にてころむ事
高よりしりしは時も左手を高に寄れば又
多目を包けり香奠の部を西よりして手に
折返し常の祝部の者代も右の方と取り
てき包みたの事を折返しとさうらひの
上に取合するに三三三三の香こえし
上に面下には香奠の部を西よりして手に

上り伊香真下に百匹と云ふ儀に主人は
もとの香真に三三年と申の差あり上には
百匹は白銀と云ふに伊香真と云ふ同様の下り
上に香真下に百匹と云ふ事と有るは信

一 貫錢繫板吉山三事

常の祝事には吉山貫錢の如くは
はりぬき一柱にほりて百文の長
下の吉山は吉山に揚の裏と云ふ事
上の吉山は両吉山に吉山と云ふ事
繫板の上の吉山は吉山に吉山と云ふ事
して又揚板の吉山又吉山の吉山は吉山
長短は吉山と云ふ事
祝言の吉山は吉山に吉山と云ふ事
吉山は吉山に吉山と云ふ事
裏と云ふ事
吉山の長短は吉山と云ふ事

又揚板の吉山は吉山に吉山と云ふ事
口傳

一 入部く太刀目録折板と云ふ

是は主人入部有る儀に祝儀の使者は
揚の時機にて太刀目録折板と云ふ事
なり又折板の太刀目録と云ふ事
折板と云ふ事
のたし折板と云ふ事
揚と云ふ事
と云ふ事
のたし折板と云ふ事
江戸の折板と云ふ事

一 知行書お拜領の事

是は知行にとも加増の事
伊刺物と云ふ事
に折板と云ふ事

是は袋に入差かき傳信者ゆき若服おぼし
にき箱の蓋と明服差と出し袋よりあむ
袋さつおの中にき服差と附九次ハ後太脚と
えと若服入き次ハ伝信者の見えと後
と取次扱えししあきその後本阿孫れお
ともあふい隔しつて伝信りおと出にとあむ
服差と袋さつ箱入差と札紙し一あむ
持えくおむ人こあし時お口き箱の蓋と
明服差とあむ目ふけその後札折半差
きと掛の目し是さハ伝信り再取の
差さつり口信

一遺物之刀服差所極之事

わあしハ遺物ふたふとあり袋さつ入程の
あし目録と居隔ししき袋さつ入らあしあむ
りりあむにき事にあむあむあむあむ
あむあむり刀服差と袋さつ入大言二意あむ
あむ

後ハ哉ハあしは伝信者の差と持り隔し
しき昔さつと隔ししに四伝信りあむあむあむ
何の伝隔ししあむあむあむあむあむあむ
こしハ史考よりあむあむあむあむあむあむ
改中りあむあむあむあむあむあむあむあむ
あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ

一鷹島並唐鴨傳信之事

維新一ツ唐鴨にて一ツの何んけ伝とあむあむ
飼子と向しし島之首と我れしし将上あむあむ
飼子とあむあむのたの羽れり唐に飼あむあむ
なり唐唐二ツ鴨さしあむあむ二天の竹と刻
きと唐唐一唐唐あむあむあむあむあむあむ
しと唐唐とあむあむあむあむあむあむあむ
あむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ
はてあむあむあむあむあむあむあむあむあむあむ

一 鷹之鶴竹の捷法を傳へる事

是も鷹之鶴竹の捷法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能を測し而して其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の

一 的弓矢三人の上候真傳之事

主人物又の此書と違つて其の矢と其の弓と其の
真といふ事其の書と我右の的矢一事と
右に其の弓の捷法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の

矢かうとされしに其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の
能の中を傳へたる事にして其法を傳へる事にして其法すくなく其竹の

口傳

一 使者を給候付者戴候之事

先候の主人の前へ其の目見し其の口と
其の目見し其の口と其の目見し其の口と其の目見し其の口と
其の目見し其の口と其の目見し其の口と其の目見し其の口と
其の目見し其の口と其の目見し其の口と其の目見し其の口と
其の目見し其の口と其の目見し其の口と其の目見し其の口と

着貴人御座と申受者扱ひ向と仰の時き居格
の御座申服し居向腰差と扱申前より御着を
と申より御座向腰差と扱申直ぐ退り
御禮申より申貴人にも敬くること此なる
扱申申向貴人より使者と申敬し申申時を
着と扱ひ下し申申御座其の時申有御と申
前より御座御前の方に御座とたよと申
およと仰け取たよと御座止りて着と扱
着えと上げ御座と高上げつるより御座と扱
退着扱あつり御座と高上げつるに御座と
つるは使者と申申先を申日申申事

一 刀 服差 拜領之事

使者二献目と飲時と申の禮と申し御座に
も申用申少も刀又号大小と服差申と君主に
持お石巻をつり祝言申に居お申と申入
申り申と申御座持お格御座の申は御座

何れ御座と申と申して御座人御座向御座と
御座と扱おつけ取貴人御座向の扱お格申
戴扱お物影にと短刀扱申より短刀と扱お格
之刀斗と申御座御座と服差と申御座の
上に刀と差お申御座と申と申の御座
御座と大小御座の時と大小と戴扱お物影にと我
短刀又ハ服差と扱て大小と扱お申御座と申の
御差斗御座申にも我短刀又ハ服差と扱
御座の服差と申し御座と申と申の御座
の扱と扱お申扱刀と申と申と申と申の御座
扱お御座の扱お申入札折紙と申御座の扱
御座御座より御座の服差と扱お申と申と申
御座人御座と申と申と申と申と申と申と申
云御座と申し御座の服差と申と申と申と申
口傳あり

一 太刀目録拜領之事

刀服差下より左方折盛と懸る。位名の爲に
より少狭みなり。柄し横持右左交り。扇後
令目録を入。中申あら。位名並と相し所を所
摺お。令目録とつけ九方と振出した。に掛る
と摺お。兩肘交り人一向の出れ。とあまに。右目録
引分。引退。と下座の方。酒と懸。三物目と懸
あり。重中。令目録。各條人。お録。引。位名。の
来。と。位。名。持。と。三。と。ぬ。り。し。所。来。り。信
あり

一 目録拜領之事

刀服差引出。お。お。ぬ。り。の。刀。代。り。白。銀。を
目録。お。視。お。か。し。柄。横。目。録。を。右。左。に。掛
右。服。お。並。り。と。爲。り。懸。下。目。録。を。通。入
又。中。由。り。取。出。し。掛。り。し。位。名。並。と。三。物。目。録。を
並。り。目。録。を。引。け。た。より。掛。右。左。に。掛。り。お
あ。ま。に。と。下。申。交。り。人。向。左。に。あ。ま。に。け。り。と。り

引退。目録。を。と。下。座。の。方。に。懸。三。物。目。録。を
入。目。録。を。掛。り。引。

一 同袖羽織の事

位者並と考致する。同。人。並。座。並。を。掛。お
右。服。お。並。り。と。爲。り。懸。下。目。録。を。通。入
ろ。し。掛。り。し。位。名。並。と。三。物。目。録。を
並。り。目。録。を。引。け。た。より。掛。右。左。に。掛。り。お
あ。ま。に。と。下。申。交。り。人。向。左。に。あ。ま。に。け。り。と。り

持不互上の斗ありあは物まきもは物を向
にうむ暗も是感ま人の古格二言東格の言
下時、前もま不戴也、中ものこまはは信
あり

一 玄猪餅拜領之事

是ハ貴人伊手自ら下敷法にてし又いお既
伊代代り扱具物にても先輩の者より一人宛
に當時下敷やと伊礼とては後伊前へあるもの
こ入取あより下敷はと伊礼とて呼あしとてに
伊前へあるもの何しとては下敷にて伊礼中
他信と扱具ありま君の腹ふたはと居たもく
後、礼物へ退き戴餅と名はは扱具出あまは口
不物余の口へあましし餅と扱具、いんをまの
あり、不条より口傳

儀扱要集口傳

一 貴人之前三命服差扱扱之事

他へ使者も先きの主人伊前とく問ても扱扱し
こ入中取扱扱は居たりまはより内へ入にも扱扱
又伊手厨中抱き下又伊手より下伊扱者より
時にもぬる系まのこ其扱扱中短刃にてしとて
居向ま人れまの比とて家鴨と居扱扱及れま
戸障あり下居の言してままのこ厨中と扱扱
を扱扱、これとて多く扱扱ありて本のあまは腰を
居扱扱、差差、兼りま厨中へとて、斗の時ま
服差とり居、身も扱扱、ま扱扱、ま入、まの
ま、扱扱、の、あ、ま、居、ま、扱扱、目、加、一、扱扱、
扱扱、扱扱、の、あ、ま、居、ま、扱扱、

一 貴人之前三命刀を扱扱之事

伊側にて、扱扱と扱扱物の扱扱、し、そのま、ま、
扱扱、扱扱、の、あ、ま、居、ま、扱扱、

多ふとあると仰ふも又の事を我事として
些少の事

一 貴人此小刀を様々する

君手に柄本を指又を我事としてたゞと柄の
下に居あより持お上り左肘をつらたゞと
右腕へ居上りぬらう貴人の筆上りには
こい并き耳のり何事をも上りて上りてのこ
身捲がけ年の所也

一 自分小刀貴人此の時上極事

右の事と左腕差を平らにしてたゞは小刀
を扱者多しと様し柄口を右より扱たゞと
腕へ居上りての品々傳聖にするも皆平
すらし陰陽ありてし

一 貴人此腰お移る事

まま人此腰おとみ扱せ見りて仰る時
はしりて扱はるるも左腕差とてし扱ありて

おの事、扱言御事へ衆うは腕を成す所の下と
徳也初て退き服差の柄を我事として扱見
てこのことと世なるも服差とたゞ不意たか言に
扱言は前へ封してその事へ梅の腰柄のり扱
皆流るるたのん扱にて様とおしくらや御の
柄をと見様と押込いさうと扱上りての事り
扱おはるる右の事へ扱言るも服差とてし
さうしるもへ申と見よと仰もか言をえへんた
ましたるもと仰ありて小刀と扱様柄をたて
り柄とくさくさして入る字れとく鞘をさし扱
見下りて見るとそのいさおまの扱あり扱にも
皆入る形へ口傳自刀とて何事なればは扱
んたはははは服差とて長くと扱へんた
りてし

一 他人の腰柄を扱る事

人の腰差を正すて見る付き御腰差をあら
たきふしむしてしもの差科と語をえむし御色
ゆて自かち指さるく下草比人の腰差を正す
自かち指に有るこ

一 自かち腰差他人にえむ後の事

人の腰差を御腰差をえむよし御色ゆて
指差の内ふ少力を指差御れまはし御腰差
か入有る事

一 貴人より扇ふと枕する事

若くは御たはまきあまは御出た肘と裏扇の
裏口とまき人に向むるく御扇ふとて腰
こし

一 自かち扇ふ所との時と便する事

若くはつまきしより指とあをむけ御たよと
たの腰こました肘と裏口とまき御扇ふ
陰陽の口御あり

一 扇ふに御振る上る事

是は扇の表に陰有る給くう御たよと裏ふ
振上るまのこ振あの大わはて三間五間せらる
開くまきまきより要と持たまは扇の尻と
持上るし尻より地留のまき尻を扇り振上るまの若
より枕こまき御た八楊板まき御守殿申あひの
おとまき御しはとぬまのこ

一 扇物御錯御事

是は香魚の錯をきてと代のまのまの御腰
くたきまの四角多た御たまにまの尻ふまを御
入若ふ火入向中た尻吹有御し修く長まはに中に
尻吹とまきまのまの尻吹とまの尻吹とまの尻吹と
四とまき向むまのまの尻吹とまの尻吹とまの尻吹と
お扇まよりり御腰よは尻吹とまの尻吹とまの尻吹と
尻とまきと御あらしは入まのまの尻吹とまの尻吹と
御まきまの竹の門御と向く御は尻吹とまの尻吹と

いふ事ありては貴人三人の前にては
能く吐くともうね信て我後に春其火入
たりあそこた然り火入と多る信も有るなり
りよは景の修短なりし

一同人前に出極之事

あそこの事とてあし客の頼のりてね極中を
持たせりしより事と見えりし客の信れん
なりあそこの事とてあし客の頼とあ極中
なりとてはに事なり

一 燭を持出極之事

客の手に筆と持たせりし客の信極中を
是より上なる向まのりし客の信極中を
けりあそこの事とてあし客の頼とあ極中
極の上より事とてあし客の信極中を
出極中をけりし客の信極中を
極中の事とてあし客の信極中を

一同人前に出極之事

客の手に筆と持たせりし客の信極中を
是より上なる向まのりし客の信極中を
けりあそこの事とてあし客の頼とあ極中
極の上より事とてあし客の信極中を
出極中をけりし客の信極中を
極中の事とてあし客の信極中を

一行燈持出極之事

昔は皆油とては客の頼のりてね極中を
持たせりしより事と見えりし客の信れん
なりあそこの事とてあし客の頼とあ極中
なりとてはに事なり

帳燭初ら水園に結しあしぬきいしり又
より陽の影の所はあり

一月夜の燈出柳事

主人客人月と夕後の夜に燭を油火と
月影とくばりぬきしに若れ後の夜に
このく柳の影とく陽を出に月を
後しと主人と月の向と燭ぬきし人
をの影を
夕後の夜に酒多し時あも花と主人と居
備
ぬきの影

一油火消る持事

是は吹消ぬきのくけし燈心と油の中
引込よし吹消ぬきの中へ油白く燈心と
ぬきの影

一座敷に手燭持事

書院向へ帳燭と持事ぬきの右より
右よりと持事ぬきの主人の影とぬきの影

臨所へは影ぬきぬきの主人の影とぬきの影
たまは持事ぬきの主人の影

一火鉢出柳事

十月をき初より十一月より二月迄は
三日月に火鉢の影と持事ぬきの影と
ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影
陰より火炭にきり火の影と持事ぬきの影
火と持事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影
持事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影

一香盆錯柳事

人形と柳事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影
人形と柳事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影
持事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影
持事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影
持事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影
持事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影
持事ぬきの影と持事ぬきの影と持事ぬきの影

日向と日向の向かひする人香煙をさす日向の向かひする
右に香煙をたふ香煙を長く長き香煙の時香煙をさす
中丹をさす香煙をさす香煙をさす

一 灰、押、板、の、事

凡香煙を灰を押し香煙の大小あり灰を
其うにもさす灰を押し香煙の大小あり灰を
香煙はても灰を押し香煙の大小あり灰を
ほくも香煙をさす押し香煙の大小あり灰を
押板のしりさす香煙の大小あり灰を
香煙をさす押し香煙の大小あり灰を
空焚のしりさす香煙の大小あり灰を
捨りしりさす

一 香、煙、火、加、減、の、事

先圓炭は火をさす香煙の大小あり灰を
あし香煙の大小あり灰をさす香煙の大小あり灰を
ほくも香煙をさす押し香煙の大小あり灰を

團炭をさす香煙の大小あり灰を
火加減よりさす香煙の大小あり灰を
香煙の大小あり灰をさす香煙の大小あり灰を
香煙の大小あり灰をさす香煙の大小あり灰を
香煙の大小あり灰をさす香煙の大小あり灰を
香煙の大小あり灰をさす香煙の大小あり灰を
香煙の大小あり灰をさす香煙の大小あり灰を
香煙の大小あり灰をさす香煙の大小あり灰を

一 香、切、板、序、破、意、の、事

序の香は長さ五分幅四に割く入長七分
幅五分より五分大香煙に焼く人香煙をさす
香煙をさす五分大香煙に焼く人香煙をさす
幅三分は割く入長五分幅二分より五分の
香煙をさす五分大香煙に焼く人香煙をさす
是香煙を割く大板の法をさす人香煙をさす
香煙をさす五分大香煙に焼く人香煙をさす

かりし是と松葉香としりり香も香の
層のさつハ見合まらふし

一 火敷也四季 雜有事

春三月の月七十二日の月を花の眼を香を
春北香五月十八日の月をハ前切折を
是と新と子夏ハ前切折の形を
是し五月の月ハ前切折の形を
の火敷と同是と秋の土用の月同前切折
もつ雪折の火敷と同是と冬は此の
の月此香とハ口傳同前切折と同是の火敷
とハ火敷の月ハ入也

一 香名に香名 雑有事

主人分下輩ハ香名を
所には香名の是れは是れハ
永隆又上輩ハ下輩より上輩
も上より下にして是れハ是れハ

中華ハ陽徳元ハ古にて香炉の中ハ物
カと号三ハ何トハ二ツ人ト向
有き是を人ト向陽ハ後人ト
中ト号三ハ何トハ二ツ人ト向
の人ト向トハ何トハ二ツ人ト向
又後元ハ香名の上ハ元ト号三
香と喚又上ハ何トハ二ツ人ト向
古ト号三ハ何トハ二ツ人ト向

一 香喚換之事

主人の前にて右の如く元ハ
喚は同輩の元ハ香名を
この如く香名の時試の香ハ思ひ合
多と喚ハ何トハ二ツ人ト向
二喚ハ何トハ二ツ人ト向
白ハ何トハ二ツ人ト向
此ハ何トハ二ツ人ト向

一 掛物懸板之事

先き紐ととも掛物と懸の上にとりよる紐
ほいとう風布と出し上の巻紐と糸糸のまゝ
引く是を糸引といふ又巻紐を借すのまゝ
引くも角是を下屋引といふ板掛物竿の
横より横までかけ掛物の下をたすに板床の上
上の掛るに板床の上の上には巻紐をしはは後
付めく懸の糸とまゝと懸の上の上の板
當時懸る床の懸の糸を敷に糸糸の懸の糸
うまをまゝといし掛物の懸る竿と文表といふ子
細をむかし懸掛物なれにと皆懸る懸る
又とかけり竿か糸表といふり今うまの懸る
と上は矢筈にとり の懸るに板は板

一 二幅對懸板の事

是は下屋の糸の懸をけし後に上屋の糸は
懸を掛るなり 是懸るの事と懸るに懸る物
と懸る下屋と懸るなり

一 三幅對懸板の事

中は佛懸の時先初より度比掛ものといふ
板中を懸るに中は仙男仙女帝袋等の時
中は空を懸るに懸る也 是懸る時と懸る
はは下懸るに懸るに懸るに懸るに懸るに
床のたを懸るに懸るに懸るに懸るに懸るに
みくりといふも 傍の付板に懸るに懸るに
上は下懸るに懸るに懸るに懸るに懸るに

一 四幅對懸板の事

先一番に下屋の糸といふかけ次に上屋の糸を掛る
三番より下屋の中と懸四番に上屋の糸の中と
懸るもの也是に懸るに懸るに懸るに懸るに
二番より懸るに懸るに懸るに懸るに懸るに
懸るに懸るに懸るに懸るに懸るに懸るに

一 掛物納板の事

當竹と梅枝壁へまゝに五あまにて障の中程迄
出でた手をお吉手に當る手を持つて掛り
まつしゝその上にお吉の物も床の下の風布
と上つてお吉の口傳

一 掛物見物々持之事

至貴人の前にくゝ床前より一間程隔てある處に
洋入りものや赤き床の換玉と隔てるものあり
床下の画障の右見えたるは床錦と押へ居る
るに極まで狭なり其まゝ居るに事細かく
二幅対の上居るもの見物中後には坐のちとん
りゆに三幅対の中居る上居るものと見物あり
四幅対の上居るものより膝と送り居る見物中
まゝの佛像の掛ものにはそのちより居るもの目
見上る後より居るもの目見上るもの富士の
つけ物も其より居るもの目見上るもの
大床に掛り居るもの目見上るもの

見物中より居る床の富石と見物にも右と左
と見物あり下の砂より目見上るもの
まゝの形

一 立花見物之事

是も床前より三間程隔てた所に見物中より
お掛物とて居る花とては但しお吉も人懸
花とて居るもの花とて居るもの花とて居るもの
とて居るもの花とて居るもの花とて居るもの
二瓶の向き中より居るもの花とて居るもの
花とて居るもの花とて居るもの花とて居るもの
花とて居るもの花とて居るもの花とて居るもの
四幅対より三瓶の花とて居るもの花とて居るもの
中の花とて居るもの花とて居るもの花とて居るもの
つし四幅対より三瓶の花とて居るもの花とて居るもの
花とて居るもの花とて居るもの花とて居るもの
花とて居るもの花とて居るもの花とて居るもの

同をいし少あうに後花籠の控杖花籠を
と目と目し

一 表具之若目品之事

表補表具としりき小籠の外へ細金にうわし
入るる表具とせりしと佛表具としりき三幅付
の何半寸久孫、能吾等佛座の何半寸表補
表具にせりし是奥の控へ道神座表具としり
はせりしは控へにせりし服籠の表具とせり
輪補表具としりきせりしは控へにせりし服籠の
狭き表具としりき一祝ひ東山殿の何半寸表具
とせりしは人の若也としりき

一 人前之内簾掛杖之事

至貴人上位の内簾又は洞の内の簾を表とし
其人一向掛りしりき分輪鉤もも房もも人の
手へ内籠の何半寸は様とせりし一足何の何
表とせりしは座向の内簾は必表としりき

主人のまゝして掛りしりき

一 神前佛前之内簾掛杖之事

神を陽徳の神前の内簾を表とし外して掛
りしは内簾は内簾の裏とせりしは掛りしりき
身の内今に神佛前に外と錯表とせりしり
りしは法と不知人のしりき

一 小袖着柄男女之事

男を陽徳の袖とせりし一通し後小袖と通
すし女は陰徳の袖とせりし一通し後小袖と
後小袖は男の主人のしりき

一 袴着柄吉山之事

長袴はともは袴にとりしは男より着し若くは
若くは男の若くは男の若くは男の若くは男の
法あり是吉山とせりしは女より着し若くは
若くは男の若くは男の若くは男の若くは男の

一 四季に上下袴之事

上下より元来其後之世世同用中其
 肩新後より序あり人々にはくらぬ
 たりみき印なりなりと首を四重の
 赤繩後後如ハ其ハ柳包と名ササキ
 後其後柳よりし付あくの故其袍と七所
 故より多り是ハ人の段七宮ゆるにかに
 崩るいして柳包ともし其陽と柳包
 木の包は其後後如ハ水色と名ササキ
 後其後よりしに多り水色と名ササキ
 其後後よりし其の包はびり色と名サ
 其むと表して其葉より柳包と名サ
 其後後よりし其包よりした形あり
 其後後如ハ其包よりし其包よりし
 其形よりし其包よりし其包よりし
 其包よりし其包よりし其包よりし
 其包よりし其包よりし其包よりし

今ハ其包の付裾の上下又其包の花をとりし
 用らるる包故よりし其包よりし其包よりし
 其包よりし其包よりし其包よりし

一 主人其束之時近習心得之事

衣服差と右にては凡多に扁蓋と名ササキ
 束其よりし其包よりし其包よりし
 其包よりし其包よりし其包よりし

一 仰膠物持居る心得之事

其の下軍ハ對馬と名ササキ又其包よりし其包よりし
 其包よりし其包よりし其包よりし
 其包よりし其包よりし其包よりし

一 足袋名と極之事

祝多あり湯桶に豆連鑊をすするなり
五人と申の得方に向もせ三々甲の内まの^{とまひ}物
ては多ありと云なり

一 竹楊枝上極之事

朝も水と三時の楊枝は極と云ふ事五人の
たして三方足折紙をく折りて上りまの
肩にすつてもよし倉屋の楊枝はともり
方と云ふなり

一 五人の髪後勅使附年始之事

五人の髪は仰ある多幻を是と云ふなり
衣服と改定を勅するなり式子細事幸の
衣類ハ^所隠れかききし多あり水とばひ
服差を角ふ多き髪と次は五の髪見と
初等勅の月代またの髪見より一初在と
一初カ中と一初カしと極は利カ際した
より出なり極をいはいしにたると極

右と一帯しより上より下はと云ふ帯に
してとうしぬけ毛と云う扱水櫛にして左の髪
より右の毛をくもつて元髪も多しき五人の心
元髪をばひききものこ正月の鳥帽なり他々
え髪とばひききと長く残し洗髪して
そと左の髪と云うたの方ハ三巻帯の事ハ二を
髪と云ふ事ハ三巻にきき上と三巻帯の事と
苗湯と云う事ハ終生に髪をききと云ふ事
かき髪と曲るく然るゆへ髪は若者極
髪極と極ししては極なりなりなり極と
其の初より切髪人の髪は初より軍師の首の
髪と極なりは極なりなりなり

一 床硯料器錯極之事

床の上に硯料器を置けり下段の事に紙と申
に硯の上に下段より書きしは硯に書きの
上段よりハ書きし紙の折目ハ下段より見

右ふたをたきうしりしたる(すまじり紙)紙
の管に硯をいれ箸の口をさしこめし

一 同人前へ硯出候事付状かく心持之事

硯の下に扇を右席寄の前へ渡せば其令の
たのふに硯をいれ箸の口をさしこめし
水を入
るを扱ふものはさしこめし扱ふは硯を
はうの格に出し蓋を人の右れ方に蓋を
御前には蓋を扱ふ本式は御前は傍に
すまじり紙をいれ箸の口をさしこめし
硯の中蓋は其人の右れ方に蓋を
硯をいれ箸の口をさしこめし紙をいれ
はうの上に硯を扱ふは其令の格に
はうの紙の中より引出し蓋を扱ふは
はうの蓋を扱ふは其令の格に
すまじり紙をいれ箸の口をさしこめし
硯をいれ箸の口をさしこめし

一 床飾物心持之事

あはれり物と不意真中おとす物類花籠を石
盆も書付もさうさうの向うへ見届にさ物か徳本
いこと物車実の刀掛琵琶但天極と上座する
琴も新角と上座する是は一色の中おとす
しり、額の中と明両端物と並物と上座の格に
書物下座の格を料簡又の上座の格に其石盤を
下座の格に将基盤と木口と格に扱ふはさう
又と上座の格に其石盤下座の格に硯を
と上座の格に蓋に蓋をその格に扱ふは
扱ふは蓋の格に扱ふはさうと上座の格に
扱ふは蓋の格に扱ふはさうと上座の格に
扱ふは蓋の格に扱ふはさうと上座の格に
扱ふは蓋の格に扱ふはさうと上座の格に

一 遣棚飾物心持之事

上の格に舟燈軸をのり下へ棚をさす格に
のり下へ硯をいれ箸の口をさしこめし

且三方面に向き且ちまは墨と二面に向き
下の板子沉笈式を硬神佛や板多右殿や
上は欄一箇一管これ板子小板多右殿し板多右
殿より上の欄に臨み管下は板子面多右殿し板
多右殿とこの上の板子一箇多右殿下の板子多
右殿多右殿の欄多右殿の欄多右殿の欄多右殿
何れは八代幕の額入を多右殿あり管尺八寸入
たる例とあり或は板多右殿と入たる例とあり

一 具書盤将基盤置板之事

産敷に三面の盤を並へやく何とを居り具書
を次は將基盤は木はと二面はさるべき具書
の作りとく將基を太公望より武王へ備えと板
たる例と其基を輕し好はる婦人の祝ひの程

一 同人前へ出板之事

具書盤と主人その前へ板多右殿の白

客人の方座は黒石客人の方より白き陽多右殿
陽多右殿は墨板の型あり或は墨より板白より
と是たるありし陽中の陽陰中の陰あり
主人と其基を太公望より主人の具書司事盤
の上より下筆の具書司事より動く將基も板た
るハ板と板し客人の物より並主人の物と板
並主人の物より並主人と主人の物と板
主人の方より並主人君臣父子兄弟骨倍少はとも主人
の物割君の物くく鳥めり物より中將基のま
何れ点たるまは是たりその物多弱の強より
板光と石さたるまとはうその下筆

一 床書物置板之事

達欄下置る床多右殿と下居り多て見事
多右殿のく比の床多右殿の多右殿の多右殿

一 同人前へ出板之事

一冊を我後板多右殿の多右殿はと申して

真し下にと垂押申すよの冊巻まはる指巻も
手前掛柄に申し申すの如し

一色紙短冊出候之事

是七硯蓋等に載り候柄に掛切人前にて
賜ふに申し書目等色紙と申し短冊と
上り申す事よし

一人前書物見物之事

双巻一禮して我見ると口一三折中一三折
末二三折見ると大柳巻物の格見るとわらわ
申し人前掛つし子供の筆紙と見ると巨くは
より奥までつねく御事と見ぬもの次へ對し
延門が和紙也冊巻有柄の外は是も互り
扱候して白々一二冊々とりてんたすよし

一連哥塵更心持之る

歌合能後ま歌のなへ走りし我更月の雪

三月より全所と見ぬもの遠見すは塵更に
心をまがすこれ等に人前白耳の如く
其度の貴人柄の白何らまある通をいふも
面白感らふ物とす多神妙に我白のいふ
人前も見全扇をとり候て行筆やくとす
つし人の白とつて白中も尋ね候て我白に二三句
ばくぬめりその度とまぬもの也是句と我
わつておはるその如く一積よりぬいひ花の場
月夜を去候のよは連哥師より候りてし

一同座席に候に候事

如何柄の席に其人より用る有て候なりは人の
句何ると聞ゆき言用にておはるは極合候り
法に是にわらうらぬ的場鞠馬責馬御術等の
場にて其人に用ある其事候ると候つし
甲矢と射乙矢と射ぬらと呼ぬもの

一小鳥鶯人前出候之事

昔々銅鳥時行船何のお留にても主人を人々へ
 持出す付初めはと主人の方へ向けうはく島會を
 永成り何れ限りはあききと主人へ向はあききと
 我きしして上りて事には口と人へ向きと事言
 多口はあききと丸休と口はあききと事休と事
 一五人一物トと目せと事

上はたの申勝と那たの目にと守りト又し怪ハ
 たの申勝と事ト松原と事ト人ト申勝と事ト
 ト上りて是吉れの目せひく出と事ト事言
 右の目にて左勝と事ト話者他左顔と事ト
 トく是少れの目せひく

一大小鞆上扱之事
 大小しに袋入るるを別多あり箱より取れし
 持仕ゆき小鞆ハ剛と事ト我調はわひと事
 中へに草太扱はて押取扱ひと上りて事
 大鞆あまはて調と扱取扱と上りて事

主人の言しと望に上りて望き陽と横と陰と
 大筒と陽の望きと小筒ハ陽と陰と扱取り
 是度の方より小筒ハ肩より打の陽と陰と
 度より大筒と勝はく事ト陽と陰と扱取り
 扱はく是はと事ト扱取扱の扱取りと事

一笛洞簫上扱之事
 是ハ袋に入あきし扱もあきしと事ト扱
 取の言と人の右ハ申言に扱取り人の笛と見あき
 には口ハ扱のさう扱中にて下より扱取り扱
 取扱取り扱と人申言の扱と扱と扱と扱と扱
 おりまの心

一太鼓上扱之事
 是ハ三と事トは扱の申へ入扱取り扱と扱と人
 扱取り扱に扱取りに扱と二と事トは扱の
 扱と扱と扱と事トの心

一琴上扱之事

是ハ主人の彈子成り給ふ者にて翌の申と
下り抱たはにて夫人座の下と抱持出下
おしく懸以おふ我袂出入出中例もま
るうし

一 琵琶上極之事

左手にて琵琶首と物者にて極面此下
と抱我門後におふ人の前にも此の上に
取去し人の引扱おふもの

一 座頭業肉之事

主人の前へ他所高初め時をかくと主人
座頭の袖をおおるもの吹はと主人のけ屋新
あまは主人の容姿毒細く聞て連おし能可
下におくことおま向控候白あまはあま
下座の人下あはても番役より座頭の袖と
扱ふて業肉したるうし

一 同通らおえり

盲人に通る物さお聲あまを膝三向引物
の置所まて聞するもの魚の物し酒
之時を置とて座頭酒す座頭酒す
ハ分給く酒と置く湯あまを座頭の
酒すハ元座頭の人は法し中少座頭
と座頭並座頭のまき扱のまの

一 風呂而供之事

主人は風呂にハ時をけおんとえり
御意之時を裸より風呂へあまを桶
あまを又座頭申入くハ風呂か
世の世に天井より四角の板を水
主人と入りまの板板あまを天井の
まは板のりつらまのくハ板の
板より主人は力あまを
らまのまのくハ板の板あまを
は板の上と上りて二つあまを

おろし腰もの扇子を以て背の巨く物お
まの湯島を御人ハ正一殿ととり
湯島ととりなり

一 伊坂吹枕之事

貴人の吹枕吹子拍子あがり吹枕そのし
極着扇はく何とくう位に若島くれり
山意の竹号友是吹枕くた吉の扇を
朝吹たの扇をく後吹枕も吹枕より吹
あて吹枕吹枕より吹枕く吹枕く吹枕く
吹枕のくくくくくくく

一 湯帷子着る枕之事

是ハ湯帷子と振ひるより枕也カ振く
召をりハ吹枕吹子拍子あがり吹枕より吹枕
右と右より湯帷子と湯帷子にして
少くく

一 伊坂吹枕之事

枕をさるる君臣の禮を主人のちと枕
するは仕官とある人々子と父母のちと枕
さるるれ之男の遊ハ枕のちより振くのみ
さるるれよりよりよりよりよりよりより
よと遊るの枕のちより振くより主人
の枕のちよりよりよりよりよりより
主人の枕のちよりよりよりよりより

一 同祝言之夜取枕之事

遊の心根を如く枕のちよりよりより
男の枕のちよりよりよりよりより
そのハ背枕ととりよりよりよりより
陽より昔より又睡よりハ枕のちより
ちき西の方にはよりよりよりより
寝る人ハ枕のちよりよりよりより
おのちにはよりよりよりよりより

一 枕のちよりよりより

男の夜着は袖と巾着の多し折るやれ初着は
袖と巾(折)多しもの常の夜着は初着の上
蒲團と並行り是ハ晩上あ終着し御着
之時き蒲團と下に夜着と上は並仕也との
なり

一 主人の念珠香合上御事

佛多き前當世と雖も昔主人念珠と併
淨し念多くと成るも念合とたり上珠紋
と右より上より香をえく燈とく陽をりぬ
たり念合と上より珠紋を退くと淨し陰と
なり上より念代を念合珠紋にもなり

一 焼香仕御之事

是ハ何ぞ身にても法多あり主人為代の御事
に御代門と入つて佛所のもの必し座す
其香合と通せば無事しこまらぬ佛事
を御代山門より佛所の御事とて御代

及事あり佛事と通るも中を多しなり
端を通ると大なる御事なり外と香のともけり
多しなりし御事の多し水所より多しなり
は佛あり口と扱為佛事人目録何事は
手に持上り長袴にて行時き小刀と御代
御代の事にて服多しと長袴のくりなり
わらし上り多しなり先服にて御代御代
は上より香合目録と御代御代の御代なり
並に相り多し御代御代御代御代御代
香の御代御代御代御代御代御代御代
上より佛し御代御代御代御代御代御代
なり御代御代御代御代御代御代御代
す多し御代御代御代御代御代御代御代
及し香合目録御代御代御代御代御代
前より佛事御代御代御代御代御代
見合御代御代御代御代御代御代御代

二焼作つ焼一焼を中若く一焼ハ位牌ハ
よりゆく法事の御貴人の位牌ハ厨子の内
より御の本尊のたかき主人より伽藍と下
さき具と靈骨焼つと結ぶのを四焼と稱
紙包の懐中し佛舎にて懐中より取出し
右の如く二焼は、砂る二焼を焼捨を佛舎
おとあたるといふ事と下さる御の事を焼く
扱退里に一間退退り位牌へ向ひ一拜する
お祈の如く三拜する及勿論法務をいひ
その上にて焼する事ハ上法ありありし
うらに是ハ位牌とをさるり中よりゆく祝具を
お祈の如く焼く俗人のにゆくに当座ハ山石
下座はては座を指し名代の焼は位牌へ
差向ゆれハ位牌画はにてまゝ出する
の位紙はる手御施子の殿と名代の物を
並置の如く仕舞居る御の如く焼く後ハせ
居る一しより位牌へつれしお祈の宗首に
御威名と板に書置殿の座にお祈する事にて
香を焼事あり是を門拜とて百姓所會
強まるとは昔はみお腰をかゝりて
うらし扱山門の如く番人下すやうなる
の事ハ目をしと座を右の甲の上へつれし
直すもの事の御主人先祖の忌日御位者
みさるも位牌の前はは御を二焼にして
折く長ら位牌画をこ焼とて席を
摺りて位牌画ははの御を二焼の如く名代の
位者に限ると自然焼す御位牌画
よけて取れんともの事ハ記す

一 佛前へ花手向御事

あわさ花にて佛の身を時々花の表と
佛に向さるものことと佛の如く三拜あり

田の長とら面に向き花ハ佛の方の色ハ
三々とのく

一 燈置板之事

油火はくも燭油はくも佛のたふちくもく
者も趣き片銘とくも両銘とくも何そあ
きりハ花籠も何あはきり

一 自分焼香仕様之事

他所より来ぬ人ハ限人可醫師を自ら
焼香に事なむ名代の焼香法と申す中焼香
ハ初間ハ勅うするものなり此時より後
所はくも燭と板と名代所はくも何き服
り後ハ板とくもしハ名代の何の板とくも
服も寄寄の香と二焼あはきりハ名代
にハくも位牌ハ向はくも服の何とくも
あはきりハ自分の焼香ハ位牌ハ向はくも
なり

一 鞠上板之事 付見お心持并敷取様之事

所鞠上はくも鞠桶の何とくも何とくも
きりハくもするものなりハ名代の人なり
掛りの内ハ入板とくもハくもハくも
寄掛りの内より 網の何ハ鞠あはきり
者ハくも風板の草と板ハくも腰板と
持たハくも腰板とくもハくもハくも
たハくもハくもハくもハくもハくも
見ぬの人ハくも腰板とくもハくもハくも
踏ミ店ハくもハくもハくもハくもハくも
拜退とくもハくもハくもハくもハくも
横鞠あはきりハ名代ハくもハくもハくも
取ハくもハくもハくもハくもハくもハくも
鞠とくもハくもハくもハくもハくもハくも
是見ぬの人ハくもハくもハくもハくもハくも
遊ハくもハくもハくもハくもハくもハくも

呼びし能事の人十と知らし伊能と六十臣の
ふりあり

一 鞠場へ水打掃除仕振之事

公家門跡主人の毛鞠の合はる近習の人
匠し勝と西備あまをわかわけとさへも
祈り向はより鞠場へ入後退り水海形より
軒のまより改めくおすくはる所へも常には
研と入るも些少かろふとあつた常事には
外へ掃きも是とあ入所とより後には習は
水と水打は茶あまり榻と場の中へおま
水と水鞠桶のさきまを掃きを桶よりあ
鞠場とあそその初は鞠とあむ吉の
よく治事に掃く是は鞠場へまりきり
有極之常の暇あに右右ふりあまり桶に
掃かふことあむけたりとあらうよし

一 鞠場にて五人のあや事

是を鞠と蹴踏す内は和居とも鞠他人のあ
流す時かりの際へ差寄り掃く四本掛
のより當春木と音取して後にはあまの
なりあまの木と春柳夏椿秋楓冬は松
ふりあらう

一 扇と折釘に御意心持之事

生類の有陰の扇は夜とに表と外へ見と
つけらうは掃く掃きあまの非怪の陰は表と
外へんと夜は裏と外へんを掛るものあり
是ハ三間五間ひららゝ夜は四つは間ひらら
掛るもの有怪非怪の陰とには御意心

一 主人隠密之状を火に事

火中へ火の由何はらとささくしてあつた
御意にて二つ三つに余節とていふはあま
る御極の古事と主人の隠密とあま
そのあまらにゆき火の中へ入るは是ハ御意

一 境より思食御氣をいよるは
伊集はとらふく是ハ殊傍の古定なり
古人ト置るん

一 至人之前を状とせ状と讀事

至人此有の勝元一寧て状と徳をいよる細
之人き何もたの耳陽言はに右の耳より能お云
聞ゆるぬこ初り魂をい書物の水月を個ぬ
くへの徳まると夢詞なりと恰好く他人の
批判をいふに徳と功者なりとすれば月
より詞を為流而傳の秘事教は是と事
信よりく先状は後に事く扱は至人の
前はて他より事と状にてもいへ何状の状
はくは是徳とくといや三句を徳をいふより
實より大脚とえりて讀る古定より解意は
徳初より一生ははく後著る文字はたけり
おりの徳の信の思ふも而も面目より住名

古人ト置るん

一 盆に香炉其外のお据出御事

人形御舞弟木會歌の音臨める盆にお据
出人の盆におおる時人形御舞弟木會歌
の題を主人の方にて持お御前にお置時人形御舞
弟木會歌の長振の貴人の方より白状に
順に置しおくる奉成順に盆にお据る
先におし元日と順に盆にお据るに初より
御舞人形主人の方にお据る

一 貴人より盆に持危丁仕候事

危丁ト詞を古詞に古人ハ持危丁此危丁御舞
屋下をいよる世の中質素の風俗に南ま
小刀をいよるあく葉切小刀等にて菓籠の
長とわく危屋丁と御舞人形と詞はは
ころもはく御舞人形と御舞人形とわ
つころし御舞人形と御舞人形とわ

洗ひ枕おのせぬ丸たらしめる様おとハ後をむ
うぬきし二つお割指の魚ことう二つお割
たる様お甲のきより思ふむらりて様お甲ハ
横刀と為中のきしとうとすもこの年を梯又
先のとうにほ様お魚たのきより丸ほうり思ふ
むらりて後お壁お割横刀と為室ととう上
りよのく陣中ほて様おむく何き此の皮むく
中ハにほきお皮むく物ありとこハ横刀と巨えと
様お取備の様とこ多きしハ味方にも食
あつぬ

一 瓜危丁三事

瑞午前後に相ある初瓜ハ大らあつハ皮をむ
おきき瓜ハ丸あつう洗ひ壁に四つ割にして
肉の苦無とさう錫の筒おと入して湯箸と
さくはさくお用筆の舞ハ丸たのやく皮を
むら壁お割ふ大成ハ四割して危なり

初瓜を奉るお用中を昔ハ輪切今ハ五人
湯好によりてお用中も壁割今も小兒お中
ハお用中お後たり輪切ありお用をさく皮
中の水と取きお壁お二つハ四つに割こ
或後おお用をさくの瓜危ハあつう逆標お
皮とむくむらりて是も中の水とよく取
つまんとんえありあおむらりては三人の
前おて瓜をさる時さ上と切さう自分勝後
五人ハさるらりておあ付まはさお用ハ瓜の上
より色の善悪と見おして花苗の節と小刀
にとさう肉の色をえと皮とをさるあつむく
後ハ傳さる上と切すてその後壁お中
輪におさるらりて何とて柳之付ハ皮と洗ひ
小刀と洗ひ枕お裁お庭をすもこの年

一 梨子危丁三事

花苗のきより小刀とくハ丸あつうはさくむらり

枕をさめて輪切りに枝の甘き草を置
二ツ方せりし割て輪切に之皮をむく
能く大嘗ひしき皮をむく前ふり
二ツ割りに半月形を切皮をむく亦然也

一 小中子児一鰐頭出極之事

是を切るとははるはく是の時ハ楊枝をさし
煮るこしし勝手より不切出たらきゆひを
はよま切あつるの少兒中の鰐頭男子ハ
丸をうり中のへんとをの割りに極る極る

一 屏風を極る持之事

墨繪と彩色の極屏風の極とと極その
次ハ彩色色具次中彩色極彩色をさす
ともは中々はつし色極短冊を極る
屏風ハ一の上極く入中の極あ少くは極
稀なるもの其時常の事ととたるとは極
まるとも免たらうのし

一 客の寄掛物習事

昔き出た客呼びを山禪迦達磨の極
來迎の西院滝見の觀音文殊より極ると
掛あり公事から事極る時人丸等知勢を
神の極をけ武士の客にき馬鹿の極を
掛たらしとも今ハ左極る極る諸國
右所の圖仙男仙女を書たらと如何の
客ありも同る

一 風鈴の下通るん持之事

是ハ縁類かしく約風吹と知為のまのこ
ヶ極の下とを言時と氣をひし短冊
既と當て風鈴とあらはぬまのく武を付床
の中ハ喚鐘とさけま床のおとしくけり
約舟をとりはるの(是も氣をひし既と
阿そぬまのぬり)

一 師匠康出入之事

巾着（たてかぶ）と冠（かぶ）のふち
にお入すし巻上（まきあがり）の
出入あり

一 町連幕出入之事

是を様の服より出さるるもの
（裾と巻上）
さうその形

一 外幕お入之事

お入もは下に居るおもはる幕の裾とお
我段の上を持上りお入すもの
（さうり幕の裾とお入すもの）
幕の裾をお入す外もさうり

一 座敷へ額つけ様之事

張はる額を客を座敷へお入すもの
（さうり赤の上に客の書はるお入すもの）
宸筆も客の筆をさうりお入す
の額回もさうりお入す

内を掛外を掛し
（伺き持明院殿のお
法と伺り内を掛外を掛し
伺き持明院殿のお
家法と伺り）

一 馬屋へ入馬見候之事

馬屋の口へ所お入らるはより入我を
（右衆より奥進見もの）
は我たのちのより入候
（右衆より奥進見もの）
口へ所お入らるはより入候
（右衆より奥進見もの）
お入るは所お入らるはより入候
（右衆より奥進見もの）
さうり御見候はより入候
（右衆より奥進見もの）
つらしたちより入候はより入候
（右衆より奥進見もの）
馬屋へ入馬見候はより入候
（右衆より奥進見もの）
とほらくはより入候はより入候
（右衆より奥進見もの）
はより入候はより入候
（右衆より奥進見もの）

一 度の整馬見物之事

度一トリ一番に二番と見二番字三番に
よと見四番に裡と見其後卒の如く行く
度あしよと見しと見しと見しと見しと見し
さう五人は馬をえんきと見しと見しと見し
ハ尾のきと見しと見しと見しと見しと見し

一 馬上の主人の物の上之事

稽場は馬場にして馬を御免候しと見しと見し
物の上の時手調の掛ひと見しと見しと見し
踏はる程と見しと見しと見しと見しと見し
是と見しと見しと見しと見しと見しと見し
その物も地逆の向きは来たり主人の物の上
事の澄と見しと見しと見しと見しと見し
口傳

一 具足見物之事

具足いたの射向と見しと見しと見しと見し
と見しと見しと見しと見しと見しと見し
つしと見しと見しと見しと見しと見しと見し
草摺のきと見しと見しと見しと見しと見し
又上りて主人の具足ハ錦嚙のきと見しと見し
目もいんちと見しと見しと見しと見しと見し
と見しと見しと見しと見しと見しと見し
糸の色によりて何なりと見しと見しと見し
芙蓉ハ花車と見しと見しと見しと見しと見し
うつしと見しと見しと見しと見しと見しと見し
いれ糸用と見しと見しと見しと見しと見し
中事なり

一 甲斗見物之事

甲ハ一番に具甲と見しと見しと見しと見し
又三番り右の太刀のふりと見しと見しと見し
方と見しと見しと見しと見しと見しと見し
ハ備座のきと見しと見しと見しと見しと見し

て何人かもし所持ありて一り張樂ありし
引事曰る

一他所にて人より見極之事

張弓にても弛弓にても見付は末鞞と我
者して兩手にてたして兩手にて下り
極の上矢擗の所目より伝ふを送り
持上末鞞の管形とて外竹のあり
末鞞の管より伝ふ節は削柳の目とて
本管よりて本管は肩に切柳の竹の
物より握りて見らると見られざる
るるも之を矢擗の所初目とて多し
至極の留ありて口傳

一矢見極之事

矢の寄りと考観する常あり射矢を射付
の常と考観あり射矢とて見るを甲矢とて
射付の常の所より羽の矢とて見るものあり

乙矢とて一多神話にすけ常と考観
あり初めより根の所目より見るもの
人の矢とて見るも無禮あり外に此矢は
そしる心内へ此寄は不望の氣味とて古人
あり

一人より張極之事

右人の村をばらばらに横に押す一人はこ
張りて一人を抱き一人張り一人張極
一人一人以上三人は張りて一人はこ
もるもわへ向ひ張りぬまのく只傳東南へ
向ひもるもらまを後にぬまのくもるも
ありは本管の体強をわくして張りし
弦痛くもぬまのく本人のらハ弦痛くも
もるもし初稚の人ありてとてはこ
押さるる免ぬまのく舞へ成ほと張り極
張りのはこられお入りはこはて踏も

一 弓矢の袖より掛載するは也

一 的矢道おえ事

一 弓斗之時きりたつこの所を射止るに
水引にと弦をく二子も同じ三子ほどきぬ
子遠ひに入まつし難羽の矢と下り
真羽鷹羽と上に狙ひし

一 弓人へおえ事

新木弓を削らと道おふる何ぞ射止る
ほしらぬ村にも握草と巻弦仕掛
弦にけしきほあつ村と弓を削る事
削るは不言その人我射訓は弓を人
以望してきす時きあなほ射を解
是すまのく音あつ初り物と射ハ握草と
解弦を拭ひ紙にて包水引にて内竹のき
弦を折のち新し草と振とにけ弦
まのり古実口留者にけり包折折あり

一 白木弓を弓懸置事

白木と上へ懸弓とり掛る末指を東南へ
するまのく西水へはとぬその時り口傳

一 弛弓張弓置極事

もつしらハ陽あるゆふ初お登り三垂とも
東南のちへ張るハ張る西の方へ
何れ末指ハ東南へ向ける西水へは向ぬその
時り

一 他所見舞に得心事

是舞の最初遠意何らつはは事い先事
と乞内へ入事はく多とくあつ弦朋友の間
はと外より聲をけきまといきしや内
へ入るは喜まの母れとぬまのく是第一事
やう他へけき朋友の二階位ひのちへ
あつあつとけり何らぬその時り能くきまひ
すしつとけり

一 戸障子明る皆之事

路次の戸と明り入ると巨本をえんと明り入ると縁類の障子と何けてもその伝書は
あると不見事一喜此障子一曰傳

一 座敷着座心得之事

座敷にありて禮して座敷にありし掛置の
立見違棚飾等見おしと儀中事法に
料程は後座より掛おし見おしと儀中
延至思し錯おし喜此之の為なり

一 門札お祈之事

正五九月祈禱所より尋ねれし門札お祈之事
甲丙戌庚壬之年ハ陽の年のれが年中此
札は何れもまた柱へお祈したと儀中
外にお祈した柱へし丁巳辛癸の年ハ陰の年
ハ一年中のれは何れも上にお祈し右の柱へ
お祈の始り今大形お祈の柱一せとせお

お祈法に不祈事く吉符にも將抱新桃
更舊着し年々折うつ儀中と云
てハ正月朔日は毎年桃の木に札と門札
と年々正月元日ハ祈せしり

一 道中関札お祈之事

関札ハ 鹿苑院義満將軍の御代初よりいふに
宿入り札ハ右に宿外のれいたまはる宿都へ登
るいとハ札の表を上の方へ向て田舎ハ下の方
札の表と面合へ向て今江府^{本庄}宿泊り
いはゆる御きり此故實と不知本陣任せおし
せらぬハ法にお祈お祈下札ハ関札ハ不成
小身の人々本陣の門柱へお祈した柱お祈と
張り也泊札ハ右柱ハ張りし是も内よりある
たたと覚はるよりし是も宿入り宿中宿外
他法と也

一 同下宿札之事

是も休きた柱に張る泊き右柱に張るは
宿割心はと申付し

一 道中幕打扱之事

豆休の節より表と通りつ向て赤まのく泊幕は
裏と通ら向て赤く昔の幕はた形地白く黒故
にて裏と通ら向て赤く裏きつり故ら表と裏と
よくとまきく近代家々の幕は厚か故ゆへ表裏
分明なりは表とい菊とら何る方裏は菊と
の詰目なりき登の時陣の縁柱は折打
何るゆへ江戸の節の折釘は手繩と高匠々
上方に赤く幕とすへお留裏の赤く一尺階打
はまの節は口傳阿つむろしは関れをによりて
幕の折扱にて休泊と知るといへも今関れ
はくはり幕は古要ありはなり

一 番所幕打扱

何より番所より城の節より町より幕と

おそい申る代法也本まのたまのにはともあき
侍番の方れ幕と上幕おまきく新時の辻固
等にはとも寺社の園はとも社の節より外の
方へ幕と赤まのく糸々口傳

一 町連幕打扱之事

内と鶴目の町連幕と表と内へす多形へ
庭はて見おある付る表と外へす多形へ
宿殿とくからし町を表と内へす多形へ
なり

配膳門口傳

一 座敷ニ三方厨斗蛇出炊之事

是ハ婚禮之時智入留入我ハ諸祝手又吾人智
入來の時物々出さるる木地ニ方斗蛇出炊事
長男斗一把置茶巾昆布膳袋と動かし
子ハ左邊ニ是と生けしと三方ニあはし
長男斗と向く前斗切のしと立てあするハ
當世のはくしとまじりし膳斗の廣さ
客のたしと持出るさあはく膳斗の細さ
客のたしと持出るさあはく膳斗の細さ
つし物おぼゆるはしと三方とあはし
腰乃
間目と上座のさしと膳斗の楮目より
おきお客より三方程と向きた膳斗長
と変換り三方とわきあし押さるる
ははくさの内に窺はし追付はし
ははくさにあはし膳斗長し膳斗長し

置摺りしりし持之口傳

一 貴人西進人ト本二三向振之事

本膳と振之 陽多付其座のちうち付は向
まよひく二の膳と振之 又由膳と向陽
それと向膳振之 座に向わたり 引茶とまわ
二のち(重付)本一向 陽三のち(重付)振之にも向
向陽多付其座ト口傳

一 西貴人ト通之事

ある人ト膳と振之時にかまひある人肩をあり
運速ありあり本膳とす 陽多付其貴人
一向三一行 中向 座の中と振之 膳と振之
あハ二行 中向とありあり 陽多付二三向 膳も同
ありあり 座のちうち付は向陽 貴人のかまひ
一向 中向と振之 何れも付は向陽 本膳と振
ありあり 陽多付其座ト口傳
その時(重付)陽多付其座ト人ト二行 中向

舟西進陽多人ト中ト一行ト陽多ト人ト陽多ト

口傳

一 二行列座の客ト膳振之事

是ハ客の致し向ト通 二行ありあり 貴人ありあり
肩と並替ふありあり 陽多付其座ト早ありあり
客ト向ひりし店を時子左膳と置ト一同
右膳と向ひりし膳と下にも置ト 匠座あり一同
中向押しし膳と膳と取振さすト一同
膳と下座の直ひりしありあり 陽多付其座
二三向膳と振之 陽多付其座ト向ト一同
客七人一言にありあり 貴人ありあり 其の客致
向ト通ひ二行ありあり 客人に通ひあり
向ト通ひ三行ありあり 本膳と振ト通ト人ト
三の膳と向ト二の膳と振ト通ト人ト向膳と
振ト通ト向ト通ト式法ト通ト口傳

一 一行振通之事

一上座帰りの事

客人斤方お差座之時其喜勢程かよひ
一行お歸り出勝とつり膳と下おねするも
一因に一事座の通ひよりまゝ二三向階引也
等も同事く是と事座歸と云なり是し由と
す申人云と据二と据人向階と据るこ
是ハ通人ぬく客人大舞の時若ぬ二り振あから
わつハ通二人わあし上座の客よりす一中と
一行お歸り付又通ひぬ人あきく出る事ん
膳引ぬ何れもおあらかよひいあ方とあもあ
く膳もつ入かろひハ中とつりお歸りく如行
入つしするととととと云く

一衝掛と云通る事

是ハ書院二間幅ふとの度ハ両方に客列座
の対若るを二り振の通ひま通れハ片と刀
二ありて成わたりたり然るにふ多掛そ

一食再進盛炊上中下之事

一行中通りとお互お力違ひおして御射
初我居るもは入く場ともの二三向引也
者も皆同事也条々口傳
鉢を盆とぬ人ほし又客大勢何らハ四御も
下座つおあ一行お居居て御と上座くおあ
時あはして書と丸書の内と上座く見と行身
ほし服おきたまふと受右身ほして座にまはる
お子と鉢の内入お切りく又初りお子と
書の上へお出するもはとて対お子ほして
お子ととうたはして書ととう下にはおお子と
陣の中へ入おけるも有まある書規戒の
振舞ふハ膳より一箇の枕と物を賜ふと
のとおくお膳も入く是と書と書とよ
常と人朝と魚の通ひりハ書膳もつれと本
乃くこして食の盛炊の事と云と云と云人の

湯食の再包ハ右腕ヲ左手ニ持者多クして
腕の裏面を以て左手の腕をうつし右の腕を
以て握りし扱ふと右腕を二扱子入み腕を
右の腕に左手を以て握るものも握るものも
再包いたるを再々之を右手にして腕をとり
たつ扱子し飯を入る右の腕を以て腕を
再々之を右手にして握る中へ軍人の右の
とつたはたして扱子ものも列座の者も
御座ると左の腕を以て腕の裏面を以て握り
ある軍人の腕ハ右の腕の裏面へ引懸たるハ
習し種とよなめりて再々之の腕を以て
角々引懸色口信

一 汁替扱之事

客の飯替汁替之人一同おあきり扱子
ハ右の腕を以て扱子とて腕を以て扱子
とありその時ハ右腕を以て扱子とて扱子

扱子とて扱子とて扱子とて扱子とて扱子
勝手より扱子とて扱子とて扱子とて扱子
と持揚りて扱子とて扱子とて扱子とて扱子
内に汁の替らぬも扱子とて扱子とて扱子
らぬもの扱子汁の替らぬと扱子とて扱子
左腕を以て扱子とて扱子とて扱子とて扱子
汁替ハ客の扱子とて扱子とて扱子とて扱子
扱子とて扱子とて扱子とて扱子とて扱子
差別けり口傳

一 屋引扱之事

是ハ亭主引扱客大衆にて二扱子とて扱子
と扱子と扱子と扱子と扱子と扱子と扱子
下座を以て扱子と扱子と扱子と扱子と扱子
と扱子と扱子と扱子と扱子と扱子と扱子
扱子と扱子と扱子と扱子と扱子と扱子
扱子と扱子と扱子と扱子と扱子と扱子
扱子と扱子と扱子と扱子と扱子と扱子
扱子と扱子と扱子と扱子と扱子と扱子

たよと海船すくた柳の空北いたよにて
引おと入たよにて海すく空を載り亭まも
あし礼するもの青空の舟中ハ 雲と
取入あよにて所船の海すくまよのくはよハ
海すくあよの船すく舟人あよハ先すくかよと
あよハ海すく者よ入よハ海すくもの

一 肴出柳魚島精をわら得る事

芹焼牛房獨活炭淳也海魚類の精を
肴いたよ方にまよの魚類ハ各の方によく
まよの船すく又海魚ハ川魚の肴れまよハ
海魚を空あよハまよ川魚ハ右の船すく山の肴ハ
左の船あよハ右の船すく但水多ハまよ
層のハ船すくのいりまよハまよ川魚ハ初船す
船すく船すくたよ船すくまよのハ陽ハ魚類ハま
陰すく山の肴ハ水多ハ山を陽ハ田舎ハ陰ハ
海魚ハ川魚ハ海ハ陽ハまよハまよハ川ハまよ

海ハ陰ハまよハまよの教はまよ三向まよ
首付まよの事ハ常に二の船すくまよの振舞の舟
まよの教ハまよの船すくまよの船すくまよの舟
右の船すく左の船すくまよの船すくまよの船すく
左の船すくまよの船すくまよの船すくまよの船すく

一 吸物引替る事

二の船すく引替るまよの船すく引替るまよ
吸物と持おれまよの上座の肴ハまよの船すく取
下座の肴ハまよの船すく取吸物と持二の船すく
まよの船すく引替るまよの船すく何にてまよの船
すく時を皆せんはまよの船すく内まよの船すく
陽わいよこまよの船すく

一 引替置換る事

組をにして引替るまよの船すくまよの船すく
間ハ置換るまよの船すく二の船すく三の船すく振舞
りハ置換るまよの船すくまよの船すく三の船すく

振舞の付振舞平四の切目焼の類に寄るた
まにうらふしを代を夜泊しはる振舞はは曲
をよこしを時々面々を振舞と向階門をさし

一 盃を初振三方お置之事

禮を外祝第振舞之時は高座又ハ三方
お置にとし正客の前座の向二三尺もつり
置りまのく正客二人あまは殆どあつた

一 押置置振之事

盃をとおし其後お押置とて三方に水仙花
杜若まゝお踏若松の神草の盆をさし
巻鯛お出つしと代の幸茶にゆき
おとしりし高座より角掛間と一尺程を
少しおささく三方お置の初ハ座着まの初
お置とて三方お載まると高座を押し並つてま
あり口傳昔ハ公着と三方の縁の目よりさすは
今をましとてこれ腰乃間目のさすは也

一 湯二付水之事

盃事終り亭主正客の盃を納り時押置と引
後に高座を引く時お亭主を飲納はるを
とておおまを引く高座はてし三方お置はく
盃を置と引次お押置しはく口傳お亭主
湯をさし湯の御何し正客お茶しはく
坐す正客二人も三人も座すは湯次客終
お亭主何お御何し水高座お亭主は亭主
試とてし湯をかきう正客お茶の初ハ食納し
初も湯も一人も三人も座すは湯次客終
もははる茶と口傳

一 近代の振舞膳の振之事

中酒一盃は只下菓子勝手に入付通ひ一回お
向階を引く銀お面を盃載向階を引き中酒
一盃は只お通出落く是れお亭主の足お引
さしはの亭主のさすお茶のさすははる

昔ハ湯の内小膳の引物多とめて湯と吾膳
より本二三と重客若と膳に重る付通ひ
お膳の引物あり 公方様の御事と云
え前ハ二の膳と引二膳と引本膳と引
るゆ 武家の前ハ本膳と云り 武家の前ハ
其後ハ二の膳と引御膳と引之 次ハ二の
膳と引本膳のちハ其の膳ハ三れとん
抄ハ二の膳と引之の後ハ膳と引之
是ハ其のちハ其の代の膳元中 其の膳
り 御事

一七五三と云名目事

是某の膳と云り中膳と云りハ本膳ハ
湯漬食と申中膳ハ其の膳ハ其の膳
二の膳ハ汁ニハ菜ハ其の膳ハ汁ニハ
菜ハ其の膳ハ汁ニハ其の膳ハ其の膳
中膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳

饒七五三といひ菜糊付の言盛にて据り申は
給事事時し申の七五三といひハ其の膳ハ其の膳
喰料多し 本膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳
七五三也 人皇之皇初

神武天皇東夷を征伐して日向國高良の
宮にお陣し 高良山祇奈本膳ハ天神七代
と書し 七五三の膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳
ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳
是ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳
任と云り 人皇御事ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳
家ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳
ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳
献事の者ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳
人法と云り 其の膳ハ其の膳ハ其の膳ハ其の膳

よらしめらぬ事く条々口傳

一五々三と云名目之事

本膳より湯漬食汁一り菜きお器盛しお直事
五り二の膳お汁一り菜五り三の膳お汁一り
菜五り今三汁十三菜なり一膳五り三ハサ菜
何きし三膳五り平のおろ三とりわい菜つみま堅
のさる事七と云お汁一り菜二り減す多し
あう三とりわい行の空盛七と云あう三と云
まは菜き膳お直事一り一膳の菜あり
そのく是或はあり一節の膳種お三汁九菜
入十菜十菜あり三とり有とり一と云を膳お
お直事一り一膳の菜多し是ハ略すあり

一五云々と云名目之事

本膳お湯漬食汁一り菜五り二膳お汁一り
菜五り三の膳お汁一り菜三り是は三汁
十一菜と云と云直事の菜の何ハ膳お三こと云

膳科にすきは菜をばら三盛すすは平の
ふ三ともく是は官廳の中にて是く直事の
平五りの膳種多に三膳お三り一膳一り
れりく其家柄ありわ三も膳一り一膳
ふ三二とり直事も有と云是は三汁十菜
之事く是ハ膳お三三平のお三三あり
皆膳お菜組付なり元年七と云三と云三
りの食ハ湯漬おろきを膳れの付り食する
膳お三と上に直事を膳食と云く直事
け信

一六々膳之事

是と云り膳おしし言切盛るは付り
わ直事の膳種七り直事三何ハ一と云あり
一膳お三とりわいありは三膳と云ハ
一人ハ膳お直事三膳一りわ三三ハ直
の如く据り一膳の膳と云膳と二の膳の間

一 攝し右目と左膳とを膳長用す下りあり
然るに膳とより大炊の家は別々なり
平吉の用はあはれ能く心はつし今膳
より向膳より四目と攝しなり昔は四目
より目の膳は汁菜と組むにありし

一七ッ膳と云右目之事

是と云の膳とも七ッ膳の膳とも申す
多に盛時討て平吉と云膳長はとの
家法は七ッ膳侍後口と大中納言中少將
侍後口侍後以上ハ歌鞠之御合にも列座
四品五位其下不叶之御下儀の組御と
侍後口とい免許し扱七ッ膳膳長侍の
本ニ云奉の如く四ッ目と云ふり(五ッ目と
云ふり)六ッ目と本々二のる七ッ目と云
三の向へつけし扱るく四ッ目と七ッ目にて
汁菜等多く是利義湯の御代ハ御所ハ

八ッ膳と云用し古書にも何れ大内にてハ九ッ
膳と云何れと云高切ハ盛時(平賀九ッ目
と申す)右に申七五云々三ハ茶茶
奥行と教今九ッ膳ハ七膳ハ侍
官位の多しと膳長と教たる右目多
い云膳七ッ膳ハ常の食料にも何れ又湯
七ッ目と云は右膳と云ふ

一 古法食物の初生飯の事

昔ハ食の初穂と生飯と右目二著る
汁と菜の向ふ並たりと盛時討汁と菜
の向ふ生飯と器とも並む何れは古法の
一並たりは生飯ハ何神ハ供りしなり
本朝の食もめハ伊弉諾伊弉册尊の二神
初て三口豆の物作らむ孫ひ穀と黄民ハ
何れハ孫ひ是れ何の初ハ恩と報しなり
善上公武元は善上公武元尊氏將軍以事

規式ハ指別常の食に生飯を以て以て
今ハ出家の事と云ふ事アリ其國より食と
莫初らるるハ黃帝の時と周セテアリト云
彼國よりも食の初穂を以て先祖を祭る事
阿る事孔子魯之君を以てせらるる時孔子ハ
君より先ニ毒を以て見せし君ハ先祖を祭
わし初より國を以て或書キ有然れハ彼國に
ても食を以てし初る人一倍すと云ふ事アリ
の事ハ釋氏の教アリト云フ

一 式法之湯漬喰飯之事

是キ古アリテ五三三の湯漬之食を以て
お器ハ七色瓶盛出する本二三据ヤルハ今
も子孫ハ湯を以て初より食の上につく事アリ
能はると云陽漬も先ハ二又し湯と喰り
四ヶ湯ハ一人ハ別くおわさる式の湯漬ハ
リハハ七五三の事あり其外ハ此の湯漬ハ

勿論勝り湯漬は初より椀盛く或の湯漬
と云ふ皆白粥の形に於てハ夕つし

一 同湯漬之汁喰飯之事

七五三に本膳汁を以て二の膳を以て集けの
躬斗扶喰ふ事ハ是も平の七五三の事なり
汁を喰ふ事ハ是も其後ハ麴の汁類の汁
多量なり是も平の七五三の事なり汁ハ
再々喰ふ事ハ是も如し或法の食ハ三飯ハ
是も是の諸侯以上ハ一飯大夫二飯士多
三飯といはれ食刀角を以て云ハ早劣の
者に食の旨の事なり

一 同湯漬之菜喰飯之事

平の七五三ハ其の時いたの事ハ其の香の如
く其の味も其の如く其の味ハ和柔の類其の味ハ
よき事なり其の味ハ其の味ハ其の味ハ其の味ハ

香物とくつねもれく膳七五三の何れ香物も
言盛ゆ(手前の手前おどくけい香物まじりし
何れと代物申はてらあはれや馳走の七五三ハ
小桶の中へ香物入るや腹中より出るといふ桶の
香物と湯漬の菜と利用うきうきより湯漬と
おどく申ハ喫ゆ(手前おどくおどく飛外して
金銀はしてはる(手前)の糸より信多し

一 常三食喰扱之事

膳中へ膳扱ゆ(箸ととりとり)とえたる
ほく食扱の箸とより君子と(婦)と扱
おししたる方と(箸)の扱とと右と(箸)と
たきと(箸)と扱と扱と(箸)の扱とと
傳三著く 食と取上二箸程大汁と取上げ汁と吸
折と喰ひり(箸)又食と(箸)と扱と
と折と喰汁と吸(箸)の扱と(箸)と扱
と(箸)と扱と(箸)と扱と

一 二二三汁喰扱之事

食と喰二の膳のおと喰お時(箸)と扱
箸と(箸)と扱二の汁の箸と(箸)と扱と(箸)と扱と
とん(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と
と(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と
何れ(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と
箸と(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と
箸と(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と
魚と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と
箸と(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と
何れ(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と
箸と(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と

一 菜喰扱心持之事

おどく(箸)と扱と(箸)と扱と(箸)と扱と

と扱ふは横をしと揚つてし汁の筋を
より飯の目へ落入つてしまふ所多しと
此等物をもふるようし

一 粉箸付膳渡之事

本膳にても二三ふても其膳の目も何と
一ふふ二ふも三ふも六ふもしと揚つて
子細に料理の風味を覺つぬゆへに
對しふ頻く膳届し本膳の筋も考へ
嗜ふ二三の菓と喰ふるし

一 主人相伴ん物之事

貴人御着と申候は是令自勿も丸く是人
百より計の自勿も陸(主人御着と申候は
此物候の自勿もしと候御膳も
食おと口中も念付候と申候は
御膳も申候自勿の口中も申候は
と申候はぬと仰りけらまはる候は口中の物を

吞込申の形を申候は其外貴
人ハ下に申候は申候も自勿も持上陸も
貴人の申候は申候は申候は 翰貝焼松名ぬい
の類はた申候は申候は申候は
よし酒を陸も申候は申候は申候は
このくは申候は申候は申候は

一 三義三麴と云事

三義と云ハ一番に羊羹二番に雲養三番
に蟹養多し是を砂糖も入ぬ生園子なり
羊形小園子と申候は羊羹といふと形も
すうや(羊羹)と云ふと角折して虎の甲形と
付る園子の敬庵かんと云ふ人ハ此物も
味ひの好むと云ふ也生園子の味も
是養く三麴といふ番も饅頭二本田り
燕麦三番に温純是と云麴といふ
法もはと二か二めんく軽軽といふ

の物より喉へ在る三色の物より喉へ過脱の
膳へ食へし如點心少物より少飲云々
云々人の子と俗に言はれし三點心云々

一 點心の酢菜と云事

是ハ羊葱雲のん整く人の膳より過脱は是を
過脱の膳より大根於四羅旬言海菜凡何より
其物くのこれより酢めしとてお取り出せ
お取り出せと云也

一 養喰極之事

書に云云かんと言われば取り置向と酢菜
と付け膳の如く阻む所し後より赤紙の
汁のよくあつと指おお取り置く時汁と後
んと扱へ入けより喉をのん何へハ粉々の
時きけ膳のお取り置けと云云かんのと
扱え取りけと後と扱け喉へ

一 汁饅頭喰極之事

是ハまんじりと取り置向と酢菜と付け膳
のお取り置けと略年ハ汁とん少膳中を
蓋にしお取り置けと付膳の古取り置けと
重焼の如き中を汁と後と昔の酒よりハ
中に何ん取り置けと取り置けと酢菜も
喉へ取り置けと取り置けと取り置けと
お取り置けと取り置けと取り置けと取り置けと
今の膳にても汁菜取り置けと取り置けと
と取り置けと取り置けと取り置けと取り置けと
取り置けと取り置けと取り置けと取り置けと
中江建仁寺乃住僧郭山禅師入道し揚州
之時林和徳より孫林淨因と云々の物より
随ひ其物より取り置けと取り置けと取り置けと

隆勝如泉多先祖より是より當代のみん
ぢり始りし

一 式之素紙喰飲之事

おふりしとく昔の素紙と云ふはまの印せし
ろくにむしりすたふりし小札の盛りに
酢菜鮫の粉を盛つけけ後のお茶と並
時汁のり及びお茶の漬點心の粉を入り
凡木の枝も三枝もかきお茶の時と湯とを
次とくお茶の何れも湯とを湯とくお茶と
くお茶の膳廣りまは湯のよとぬりぬり
せんとおける向明紙と上と下とあけたり
當代の素紙をぬり又にお茶の木の花と
盛りけしお茶の汁を掛かりしの粉と
入茶のとく始りし再とぬりぬり又
酢菜鮫の粉を盛つけけ後のお茶と並

一 湯飲喰飲之事

是しお茶の膳廣りまは湯のよとぬりぬり
せんとおける向明紙と上と下とあけたり
當代の素紙をぬり又にお茶の木の花と
盛りけしお茶の汁を掛かりしの粉と
入茶のとく始りし再とぬりぬり又
酢菜鮫の粉を盛つけけ後のお茶と並

一 三峯膳之養之事

是しお茶の膳廣りまは湯のよとぬりぬり
せんとおける向明紙と上と下とあけたり
當代の素紙をぬり又にお茶の木の花と
盛りけしお茶の汁を掛かりしの粉と
入茶のとく始りし再とぬりぬり又
酢菜鮫の粉を盛つけけ後のお茶と並

おしりたす縁をとおるゝあかりしりしりさうし燈
向せよつけをさそく事しゆ時々のたし、餅を
頂戴しそめ給事し縁をたすまはしつて菓と
おくまのさ菓のあな矢取事しゆ縁を
たしく餅を湯すえよと事あるなと事
すといし軍法を付礼しそ名と深え海世
にて毎年息巻にて縁具は餅之時は右の
縁らぬ縁あり

一同向せよ事

右の事先に田心二つお器を取たの事先に
もやしたる十二中おおるゝ大根の香物二印
何も改良裏白く大豆と甲の大豆とよ大剛
の者二印とよ縁ありあくと血ふ事しゆ縁也

白粥喰柳之事

是は西九月八般常の時ふははる月五日侍
し時を白粥喰し汁破あり事あり

子細き飯の作りゆゆは白粥をも用ゆ事ふ
りしとささちうの湯湯り白粥の形あり
喰柳粥きわ申けき汁と別くにくわあ
んすす粥へけしけしけし人けし尾筆こ
粥の初め湯と春ぬとさうさ湯と春ぬは
食湯する事あり其付縁は柳縁縁
よりと柳よりと春ぬは事

一 糍餅柳之事

是は三宮長打に糍餅すし餅菓の如く
人の皮の如くすし餅菓のこい餅柳餅を
ぬれ菓のえととすし餅菓の餅菓は菓
えととすし餅菓の餅菓の餅菓は餅菓
らと餅菓の餅菓の餅菓の餅菓の餅菓
餅菓にして餅菓の餅菓の餅菓の餅菓
小口にて餅菓の餅菓の餅菓の餅菓
その餅菓

酒酌のし給ふはなり

配酌門傳

一 上輩之盃給換之事

長時は是下作 至人貴人より仰蓋を下げ付て我居らぬ所より
 ノトキハ 載キス
 トモ 梅ヒケレテ
 酌ニ向テ 膝ヒキ
 トリ 結入ト目ヒ
 スル品言ノリ
 ナリ 酌シラミ
 ナニセニ上ル
 指別ハ既ニ美人
 ヲリ是ハト仰蓋
 下リト下思フ
 カラアテメノ
 仰蓋ナリ然マニ
 頭ハトイタキ
 位ヲツケテ上ル
 直ニ是ニ盃下
 ノコトナリ

仰蓋の孔と言ははるし 觸人面をうし 初め時を
 あははるし 三言と指上たわと 盃を右手にて
 三言の中 右の右の言 盃を右手にて 指上あ射
 つら 仰蓋と 盃を 戴き人の 仰蓋 酌の 仰蓋と
 仰蓋をうし 仰蓋を 仰蓋と 仰蓋を 仰蓋と 仰蓋と
 その 仰蓋 仰蓋 仰蓋 仰蓋 仰蓋 仰蓋 仰蓋 仰蓋
 とらふも 仰蓋を 仰蓋の上にあはるし 仰蓋をうし

臨終の時として何と臨終の事はあつたか
子方御座りて戴く事口伝

一中輩の遺徳の事

同輩の遺徳の事
古事にも遺徳の事
何と遺徳の事
少々の内にも遺徳の事

一下輩の遺徳の事

妻や子や御座りて子方の遺徳の事
遺徳の事として何と遺徳の事
遺徳の事として何と遺徳の事

一上輩の遺徳の事

至人貴人の遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事

至人貴人の遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事

一中輩の遺徳の事

料何の上の遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事
何と遺徳の事として何と遺徳の事

善し

一 下裳の着替振之事

妻や子も着替へる振と云ふたれ振る振も亦一に
振ると云ふは必ず振るの振るは振

一 着替振上中下之事

主人先んづい御意にあらは着上る事御振
守り礼路り善し振ると云ふは何れに何れ何れ
り上服差し下履は何れ何れ何れ何れ何れ何れ
その何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
たれ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
九条にて何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
と云ふ事何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
著替何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
兄何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
右履はよく著ると云は振替何れ何れ何れ何れ

一同着替振上中下之事

申す事いれども先んづ振替何れ何れ何れ何れ
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ

一 主人自身酌酒振替之事

是は主人の御事御事何れ何れ何れ何れ何れ何れ
何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ何れ

このまじりぬ目の人とは出さき陸軍軍人ひあし
陣中にはも主人破りて陸軍軍人あつて
年始あり主人自身破りてありて伊豆と
ありたりよりむ松葉統規持あり飲中
伊側へ差去り伊柳子のりてありておと
両肘突居何懇意の詞ありて門面を盛
りて初て退る儀ありたりて松葉統規
伊柳子のりて退りて伊柳子と退りて
長官あつてありて伊柳子も仰のありて
伺りてありて

至し伊柳子と長下へありて天破りて將軍の伊柳子
ありて伊柳子のありてありてありてありて
破りてありて自身破りてありて

一大流之酒飲飲之事

是は流しより主人の第一言ふおと一りのせ
おし流のた君り伊柳子もありてありてあり

枚のお器とありて流し主人散負おとありて
扱主人伊柳子とありておとありてありてあり
とありて其儀とありてありてありてありてあり
大流の伊柳子とありてありてありてありてあり
の流しとありてありてありてありてありてあり
りありてありてありてありてありてありてあり
見りの上へありてありてありてありてありてあり
流しとありてありてありてありてありてありてあり
主人より伊柳子とありてありてありてありてあり
こしとありてありてありてありてありてありてあり
とありてありてありてありてありてありてありてあり
ありてありてありてありてありてありてありてあり
ありてありてありてありてありてありてありてあり
ありてありてありてありてありてありてありてあり
ありてありてありてありてありてありてありてあり
ありてありてありてありてありてありてありてあり

と進出の後おぼろ人かと思ふと此海をうけて
載せんとし傍ら飲たるとおぼろはたゞの
なり指伝とも各目高屋の古事に昔周の成王
殷のちり玉と評まし時軍兵の中より武王へ
若石と持て武王に曰良將の法ハ嗜味と士平
と同一くする事也と酒樽を破り水より
流し軍勢をな川水と飲せらるるより流
とも事ハ初るとし是皆流第一同する若石
の法と守備なり

一 小流酒飲様之事

是ハ主人ハ杯を傳ふ事と酒と酌の例なきは
人々おぼろに主人のさのりゆの儀と飲めおぼろ
あし入おぼろとぬりしりて飲人の前へ挑つ
りておぼろとたよはて此主人へ向傍ら原より
と流すとて挑つた所とつけてハ不載臨書と
ゆ退あするくた流しハあし格式よりしりて

又家に入りて数おぼろと主人の前へおぼろと
召ておぼろと酒とちしりてゆはてはゆはて
挑つた上へおぼろと事ハゆはてはハち流ハは
匠並りたわゆはて載くはゆはておぼろと
持てておぼろと時き事ハ一亦そ主人の自身の
亦ハゆはて事ハ三カ流ハはた流ハは事ハ
の召おとすた流ハは及ゆはての事ハと
れこのよりゆはておぼろと事ハ下ゆはて載
おぼろと事ハと事ハゆはておぼろと事ハ載
古風を載りたわなり

一 近習向召出ゆ酒飲様之事

月の夜雪の朝花のふみ主人のゆはて
とら改なり人さしと事ハゆはて事ハ
ゆはてゆはてと事ハゆはて古きゆはてしり
ゆはてゆはて事ハゆはて載ゆはて事ハゆはて
ゆはてゆはて人思ゆはてたりとも事ハ主人の

昔に載る如く古書は所を是も事あり
つしたといきくも主人の著して
上とねんし中法より人の著も
てい子たるもの可裁と古書ありたり
上と堂録の如く柳の可時代ありし
人の何れのもの程等に對する
よは入事

一古法酒宴中飲中飲之事

是ハ鎌倉時代の言物也後世の人れ
臨る昔の中飲より今の中飲と
き主人執事よりしるし人の中
候に度中二巻のミロをまじり
り人々三巻のミロをまじり
三巻々の焼く少陰五人
五人の焼く少陰五人
日飲前日飲後馬飛小多飲
礼酒の類

鎌倉の時代あり

一嶋智持出候之事

島智の表と上座一向
はて候も物君もとり
持お座敷に置てあは
して置くお袋の敷む
お袋へお袋と入る
あはく今と女中

一酌取扱の傳之事

主人貴人の著は
はしてに置く
あはして持上
同事に下軍の著は
はして置く
凡そはて置く
軍へはて置く

下輩の如く上へ上上ツ的を以てし
低
字くはるは同輩の如く同通の如く揚
間鍋の如く回事なり

一 鉦子提子披破取柳之事

年始八朔七節句言指筆を官位元服袴着
髪置一切の祝儀の如く男酌をもし女酌をもし
扱破くはけし男も長袴袴刀をして勤まり法外
は袴着て勤まりをせし中ハ暗幕あり腰掛
うけ帯ありうにて勤まりひらり敬と云ハ柳を
くくも合杯ししは後ち由的ありて三杯ハ加ハ
九り多し三杯は居り初居あり新す初居の
居ても畏れし又中飲くこと後居あり三杯は
加ま居あり三杯居あり外居あり畏れし
是はして中飲くこと三杯居あり三杯居あり
とほとく物も三杯居あり三杯居あり
業ハ一りし柳を柳し流る人入の居るの

加(客の多く)向は主人の多くを向ひ中飲の
節(中)つと柳多入のこ柳ありまは
客人と節(中)あなりまはり節有男中節
提持中(業)あり

一 鉦子提子結破取柳之事

嘗禮の如く三九合室の節中も智入置入る物表
書院は男酌はして中飲礼向ハ節破中九りのく
中飲は加あ向加けし三時中破ありは付ハ
加し居ありまはして中飲あり三杯居あり
形(加)り初居あり所(節)あり(中)あり
又加(中)後中飲ありまはして三時中破あり
柳ありまはりまはして三時中破あり
中多しは結破ありまはして三時中破あり
ともし名ハ三杯中業ありまはり古りの花おは
つて名中結ありまはして三時中破あり
名中結ありまはして三時中破あり

畏り加ふ七良はあらくし祝言合意の付そ
申酌二良退事り今更ハハ良加算入ふそ
む物ハ三良退つるハ七良あらくし今更
古きあけり事能く留練あらくし今更

一 事度大結之事

是は結酌之時也酒酌り抛子は善く向ひ
猪身入付り度に加算人ば度言ふ向あ
方へくありと口より申酌の終り申結酌も
入事合意の付そ三九良同の言算の言
少し初り申酌の言算の善く向ひ揚身入可
算大男大女時き蓋ハ事きけり初り申酌も
多く向ひ揚身入可くも言算の善く向ひ結
酌も事の酌あハ大結あらくし今更

一 錫酌取柄之事

是ハ錫酌の首と右手にたれと錫酌の底へ
はとつくる錫酌り錫酌の腰と右手に
持たさうし昔き初り申酌のあらくし今更
皆錫酌今更言ふは錫酌あつ間錫酌
と世のそれくむあしハ冷酒の後世はあらく
むろり初りかんあつと世の錫酌も
神は頂戴の付そ又右良なるの付そ錫酌も
抛りハ首をく錫酌もあらくし

一 當世間錫酌取柄之事

若きにて錫酌のほうと流掃りかたき
右身の下拵の向へ見へぬやうに流掃り
つら若勝と流掃りと盛の付そ右勝と長良と盛
は盛事の向へ流掃り退又か加へ又流掃り退き
間錫酌のほうと長柄扱きと流掃りあらくし
若いた勝り流掃りと流掃り右勝と長良と
是と勝のれとあらくし

一 軍中酌取柄之事

是ハ常のめく不長流掃り向へすは扱き

はて雛子の菊金と押した手と雛子の折目の
上へ向け酌する時加る時に雛子と虎の芳へ
差おし加るころの盃外へ切りまてくまも退散
ぬりぬりと運くも初志よりけりかきあはれ
背をき人へんをぬきめく是西の古更へ菊の
手と押する二の素場と云祝言菊の花をむ
との祝言も何りまてくは

一 鞠場の酌三事

古の鞠合にい長かゝあまをゆりの不初菊も揚
の口より出ると載せ人よりい後を平人とい
まふりも取り扱といり今も鞠場とて錫問錫
れ敬者ともき人々菊季の木とて後をきん
砂すつし菊季の本より春柳長樹秋楓
冬を松く是は菊合の風をなほ長柳といは
鳥合井の風也餘は同事

一月見の酌三事

主人月見後の対し酌は月と主人の間にお
て酌せぬまのこ初より酒と飲せぬ酒の月へ
月の入柳は月つし吸お振やも其らに
何すつし産ありまむ所境を時しは氣をいし
ておと主人と居備ぬまは酌り

一 鷹匠の酌三事

是は新鷹を居鷹をむの時又常鷹
振り人へ酒を飲せぬ人鷹の常鷹よりぬ
その時より鷹鷹の尾をも通へうは鷹匠
の君のさへ鷹鷹を居鷹をむりて八分
鷹鷹事ぬの古鷹を鷹鷹をむりて鷹鷹
海に鷹鷹を鷹鷹をむりて鷹鷹をむりて鷹鷹
中へ鷹鷹を鷹鷹をむりて鷹鷹をむりて鷹鷹
よしとまへ鷹鷹を鷹鷹をむりて鷹鷹をむりて鷹鷹
より鷹鷹を鷹鷹をむりて鷹鷹をむりて鷹鷹
とて鷹鷹を鷹鷹を居鷹をむりて鷹鷹をむりて鷹鷹

稽いやくり何となくい言はま相をつうとわ
言事いしは後しよりぬまの形うとす
たきも酒ふと盛射に神宮も常よりあるを
いやくる形う

一 神酒戴品之事

是ハ神酒一對あるハ土器ハ一對多
少ヲ移シ戴シ之宮庭を捨ぬま
其の内ハ酒ハ嘗て酒を次ハ酒
なり飲人も人の言ハ不戴神酒
以て戴シ酒ハ酒ハ酒と移シ戴
日待月待果是餅程の神酒戴格
初諸士頂くも神酒又各礼言に
り

一 酌人に加高下之事

卒隊ハ上層貴人の前ハ酒其後
ト酒加高下酌子ハ酒加高下
その後酒し酒ハ酒加高下酌
勤て管ハ加高下酌ハ酒ハ酒
差別も酒ハ酒加高下酌ハ酒
と酒ハ酒加高下酌ハ酒ハ酒
この酒なり

一 酌にむら頂下後之事

昔ハ將軍も備もの酒其後
方酒加高下酌ハ酒ハ酒
三献と酒ハ酒加高下酌ハ酒
酒ハ酒加高下酌ハ酒ハ酒
鯉の打船の酒ハ酒加高下酌
括く二男酒加高下酌ハ酒
酒ハ酒加高下酌ハ酒ハ酒
嫡子酒加高下酌ハ酒ハ酒

一 公卿之物品々々事

前よりとて、伊勢の三領、伊勢奥より、
是ハ本地三言に中ハ松梅山吹南天水仙
牡丹芍薬杜若其の言の押本の趣々三言と
後々慶長伊豆の中ハ西宮く西宮と昔はらに
の物々を代ハ板花はく作りと是と押本
と詞多く三言と公卿と中詞ハ大内少三言
納言らの官人ありと三言と詞多く多叶如
子惣着と公にと云く伊勢の物々推く伊
頂磨一本杉の分ハ板燧通三輪の足野々
隆寛の扇布引の浪花笈ととと色々作り
や、伊々今ハ貴人ハ乱ハ掃と公にハ物
作り物々あり昔の押本と云ハ格別のもの
ハ傳奥ハ記並物

一 取捨者との事 甘里と物

是ハ伊成との湯漢のてり三言と三言と
伊成の情ハ伊成多言伊成物々伊成
お氣ハ伊成伊成料理に仕立と氣ハ
するゆハ取捨の者より伊成と氣ハ物とハ
ハ言伊成なる者ハ伊成の物と云ハ一ツ拵ハ一ツ
拵と一ツ星と云ハ二ツ拵と云ハ二ツ拵と
二ツ星と云ハ三ツ拵と云ハ三ツ拵と云ハ
伊成ハ公卿ハ取捨と云ハ伊成ハ極地と云
伊成と云ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ
伊成ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ

一 押本の事

昔押本と云ハ種々者と云ハ伊成ハ一ハ伊成
宗前より伊成ハ伊成者と云ハ伊成ハ
頂透者と云ハ伊成ハ今ハ一ハ伊成と云ハ
伊成ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ
又ハ伊成の伊成ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ
の物と云ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ伊成ハ

お造するものとは分別すし轆糸糸丸
頂透青と海の碑とさめす茶と紙糸包と
岩胆の上古法並たりとて飲事知人
を眼の留糸包なるほまの用ち貯る茶糸
糸眼の糸と茶と包糸と糸糸也新形

一 糸者々事

是を三方にては糸者折にては糸者
糸又ハ切糸と改糸にては糸者
糸者のもれ意見いろの色付焼糸ひねの糸
糸者糸を糸包と糸包の糸者糸を糸包と
糸人とも糸少り下糸糸も糸包糸包と糸包
又ハ糸包糸包に糸包と糸包と糸包と糸包

一 換者々事

是ハ糸代糸包から糸包と糸包と糸包
糸の糸と換者と糸包と糸包と糸包と
糸包と糸包と糸包と糸包と糸包と糸包

糸包と糸包と糸包と糸包と糸包と糸包
糸包と糸包と糸包と糸包と糸包と糸包
糸包と糸包と糸包と糸包と糸包と糸包

一 古法之折近代之折事

昔所成乱匠の糸包の内糸包たる折と糸包
糸包と糸包の折と糸包と糸包と糸包と糸包
糸包と糸包の折と糸包と糸包と糸包と糸包
糸包と糸包の折と糸包と糸包と糸包と糸包
糸包と糸包の折と糸包と糸包と糸包と糸包
糸包と糸包の折と糸包と糸包と糸包と糸包
糸包と糸包の折と糸包と糸包と糸包と糸包
糸包と糸包の折と糸包と糸包と糸包と糸包

一 食籠糸真糸事

真の食籠糸と糸包と糸包と糸包と糸包

七折も物と云々...
いかに解一色二色...
昔は伊呂久敷...
と代りて事...
の何れも...
多物の食...
も何れ...
皆枚...
一枚食...

一枚食...
是は七...
伊呂久敷...
一二種...
一枚重箱...
是も伊呂久敷...
目...
たる...
魚類...
豆...

一枚重箱...
是も伊呂久敷...
目...
たる...
魚類...
豆...
一折と食...
折と...
の隅...
也...
と...
斗...
の...
...
類...
感...

わしふを心相に四葉をうみまゝにしるす時し食を
き抱るが陽く物ゆくを食をたをき抱るはこまの
食をきくま事ゆしゆく可ん事ゆきゆく
は信

一 亀豆のおとす事

是ハ食量の饅頭羊養折の中れ小板が海に
さくい蛤阿まび蜻蛉の辛標を扱めをれり
表を解東お解をまててこれのと半
みれを亀豆とてゆく是成の七ちまて云
の物と亀豆とてゆく根元ハ盛の間在葉
なると持するは最初とすき後世は花正
あつゆく争の解とてゆくこの亀豆と
作言して亀豆と名付鶴とて亀豆と名付
ハ油のふきと補と亀豆とてゆく何ゆつし
亀豆の青くとまらんゆにき扱て奥を
まらん小半とてゆく半ゆき半ゆきハ半ゆきハ

魚をとりたりて魚をくもへ下る也

一 公卿并足付お器へ改鋪之事

草木の葉と向左右へて敷へし葉先と喰人
まらんへ向けぬもの葉先と人へ向するハ喰人
の改敷と陣中ゆて首実換の時首改敷れゆ
ゆりぬ山事ゆり常刺躬四ゆ改敷する
ともはらゆ何と

一 人お引出お物す前後上り事

同輩以上まハ親をへ盛の上にて引出物
す時初献飲ま二献目後ら重行引出物
お其後ゆて着と扱て子方半軍お
二献目ゆらゆら扱着とまてその後
引出物お物す祝言は厚置入の時ゆ
扱れ上り引出物ゆらゆら引二献目後ら重
ゆりゆらゆらゆら引門おゆのゆ二入目
着とゆ二献のゆを後引出物お物すゆ

子つたに華へに親言人よき引物より
つろく換着をわく念たり法也口傳

